日本における洞穴遺跡の研究

――縄文時代草創期を中心として――

白　石　浩　之

はじめに

洞穴遺跡は洞窟遺跡と岩陰遺跡よりなる。洞穴遺跡の形状や遺跡をとりまく地理的，生態的な様相を把握することによって洞穴遺跡の意義を摘出することができる。

本稿は縄文時代草創期の洞穴遺跡を中心として，1．洞穴遺跡研究の意義，2．洞穴遺跡研究のはじまり，3．洞穴遺跡から見た場の機能，4．洞穴遺跡からみたランドスケープ，5．洞穴遺跡群からみた縄文時代草創期のテリトリー，6．縄文時代草創期の洞穴遺跡群，7．日本における洞穴遺跡の様相として以下論述する。

1．洞穴遺跡研究の意義

⑴　洞穴形成の成因

洞穴の形成については自然洞が浸食洞と溶岩洞よりなる（麻生2001）。すなわち浸食洞は河川食，海食，溶食等がある。河川食は川が蛇行し，急流によって運ばれてきた土砂，川原石が川底の下刻や河岸を側刻して浸食し，岩陰や洞窟を形成したものである。海食洞は波浪による浸食で海面低下や海面の後退によるものである。

溶岩洞は2次洞で風穴に代表される。鍾乳洞は石灰岩が溶けてその隙間から地上水や地下水によって浸食され空洞化が促進されたものである。富士山の麓にある青木ケ原の風穴は地上で溶岩が急に冷えて固まったもので，閉じ込められたガスが抜けて空洞になったものである。

また浸食洞と熔岩洞の両方を含む洞窟は断層によってずれて粉々になり，粘土化して地下水によって運ばれ空洞になった断層洞がある（高安1961）。

日本における石灰岩の分布は全国的に及んでいる（第1図）（石灰石鉱業協会1997，牧・松本2000）。とりわけカルスト台地にあり，石灰岩が発達している。九州地方では中九州の熊本県から大分県，四国地方は愛媛県（上黒岩岩陰）から高知県そして徳島県と続き，和歌山県から奈良県，三重県，愛知県（嵩蛇穴洞窟[1)]）から静岡県（三ケ日）にかけての石灰岩地帯が帯状に認められる。また福岡県から山口県（秋吉台），そして広島県（帝釈峡遺跡群）に断片的に分布し，京都府から滋賀県そして岐阜県（九合洞穴），長野県（荷取洞窟）と富山県（大境洞窟[2)]）に分布，そして埼玉県（橋立岩陰），栃木県（大谷寺岩陰），東北地方の岩手県（龍泉洞），青森県（尻労安部洞窟）の太平洋岸，北海道地方では中央部，函館周辺，網走周辺に分布し，石灰岩地帯に溶食の洞穴が認められる。

このように洞穴形成は地理学や地質学による研究をとおして俯瞰できるものである。

⑵　洞穴の形態

洞穴は基本的には大きく分類して洞窟（Ⅰ）と岩陰（Ⅱ）よりなる。

洞窟は基本的に横穴状をなし，雨だれラインの洞内の長さと外側あるテラスの大きさによって次のとおり概略細分される（第2図）。

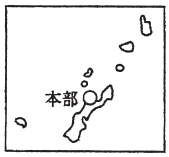
Ⅰ－a　壁から天井にかけてはドーム状をなす。文字通り洞窟状を呈し，奥壁側は暗い場合が多い。雨だれラインの外側は洞外で洞内の2倍近いテラスを有す。また同奥は石灰岩脈の場合支脈洞が形成される場合がある。

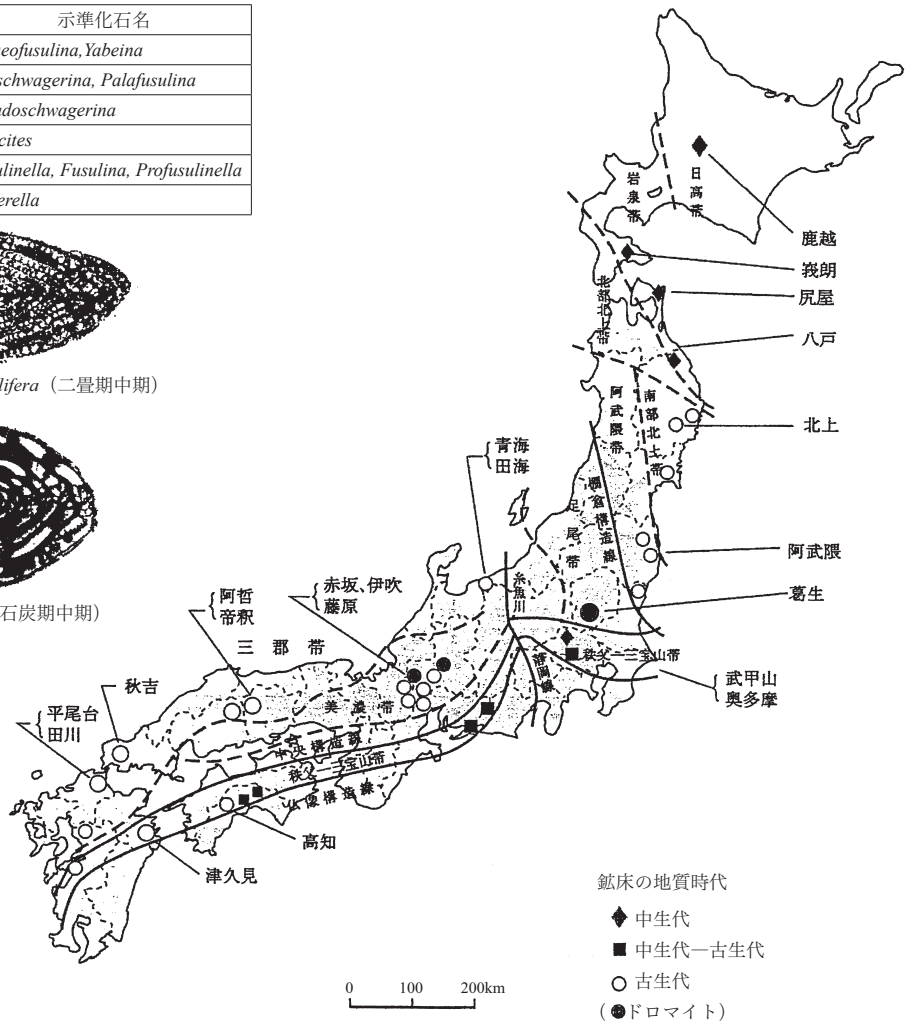
Ⅰ－b　壁から天井にかけてはドーム状をなし，

地質時代		区分	示準化石名
古生代	二畳紀	後期	*Palaeofusulina,Yabeina*
		中期	*Neoschwagerina, Palafusulina*
		前期	*Pseudoschwagerina*
	石炭紀	後期	*Triticites*
		中期	*Fusulinella, Fusulina, Profusulinella*
		前期	*Millerella*

Neoshwagerina craticulifera（二畳期中期）

Fusulina biconica（石炭期中期）





第１図　日本の石灰石鉱床（石灰石鉱業協会1997より）

Ⅰ－a に近い。雨だれラインより内側の洞内はそれほど奥深くない。雨だれラインの外側のテラスはやや狭い。

Ⅰ－c　壁から天井にかけてはドーム状をなす。雨だれラインより内側が洞内で，深さは多様である。洞外は傾斜し，テラスを形成しない。

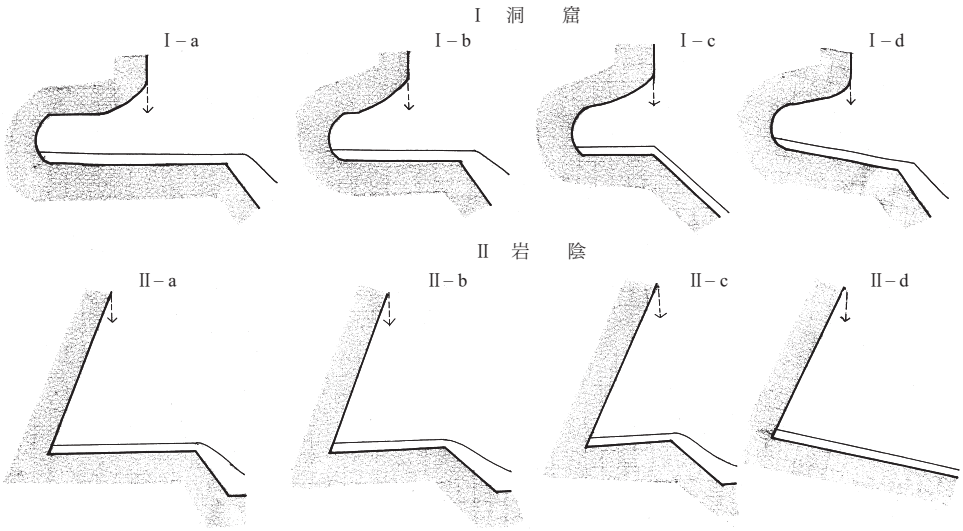
Ⅰ－d　雨だれラインの内側の洞内はⅠ－b と同様であるが，テラスは安定せず，谷に傾斜する。

Ⅰの洞窟は石灰岩洞窟に代表される。長い間雨水による浸食によって溶食されて支穴が形成される場合もある。

岩陰は基本的にはドーム状をなさず，天井の岩が庇のようにせり出している。雨だれラインより内側の洞内と外側の洞外のテラスの大きさによって次のとおり概略細分される。

Ⅱ－a 壁が斜め上方に直線にせり出し，その角度はまちまちだが約65度内外が多いかもしれない。狭いながらも洞内が確保される。洞外のテラスは広く洞内の２倍近い。

Ⅱ－b はⅡ－a 同様で岩壁が斜め上方に壁がせり出す。洞内も同様の広さであるが，雨だれラインより外側のテラスは洞外になるが，テラスはⅡ－



第 2 図　洞穴の形態モデル

a より狭くなる。

Ⅱ－c の壁はⅡ－b 同様斜め上方にせり出す。雨だれラインより奥側の洞内と洞外のテラスはほぼ面積が同一である。

Ⅱ－d は岩壁が斜め上方にせり出すがテラスは谷方向に傾斜する。Ⅰ－d のように傾斜して下がる例もある。

以上洞穴をⅡ形式，洞窟と岩陰をそれぞれ 4 型式に分類する中で，日本列島の洞穴遺跡の形態が理解される。

Ⅰの洞窟はⅠ－1 は奥域が深く，間口は狭い例，Ⅰ－2 は間口が広く，奥域が浅い例に区分できよう。Ⅰ－a－1 はさらに奥域の長さや支脈洞の形成が認められる場合がある。Ⅱの岩陰は間口が全体的に広い傾向が見られる。

⑶　洞穴の開口部の広さと開口部の方向性

洞穴の開口部の広さは一様ではない。帝釈峡遺跡群寄倉岩陰，馬渡岩陰，埼玉県橋立岩陰などは広い。それは岩壁が広い範囲にわたって傾斜している範囲を岩陰としたもので，発掘調査によってどこまでを遺跡であるのかを確認しないとわからない。洞穴遺跡の間口は平均的には10m 程度が一般的かもしれない。縄文時代草創期に利用した50か所の洞穴開口部の方向性は南方向がやや多い。順次西方向や東方向となり，北東方向も 1 件が認められる。奥行きは10m 以上の例が 7 例あり，中には50m 以上のものもある。

⑷　洞穴の落盤

落盤は日常的に繰り返される。洞穴は岩穴なので頑丈であるけれど，雨，風，雪による浸水，雨だれ，加えて樹木などの倒壊など岩庇は常に劣化していく宿命にある。木の根などによって岩肌に亀裂が入ると，長い年月に雨水による亀裂が放射状に入り，落盤の大きな要因になる。洞穴上部の土壌が堆積している場合は雨水が洞穴を形成する天井部に溜まり，その水が岩場の傾斜により洞奥まで流れていくのか，逆に岩庇方向に流れて，庇から雨垂れとなるのかであろう。他方照り付ける太陽により露出した岩肌は乾燥し，乾裂を進行させる。また洞内での焚火，さらには地震や土砂崩れによる二次的な影響によって落盤に拍車がかかる。この落盤は連続的に起きる場合と非連続的に起こる場合がある。岩庇周辺は頻繁に剥落したであろう。山崩れのような崩壊現象，その土圧によって天井が剥落する場合が多く，巨岩が落下する場合もあったであろう[3)]。また側壁なども板状にずれ落ちる場合もある。落下する天井石は巨岩，人頭大，拳大，親指大，そして砂塵のような細かいものまである。落盤が岩庇を中心とするならば，洞穴の形態は大きく変わる場合がある。洞窟が崩

れて岩陰状になった例もあろう。例は少ないが洞窟奥壁の天井石の崩落では逆に内部の空間が広がったかもしれない。その落盤の規模が大きければ大小の落盤石を除去し，少しでも洞外テラスを含めて空間を得るための努力は当然考慮したであろう。長崎県泉福寺洞穴押引文土器文化層ではテラスの端部を落盤石で補強したかのような痕跡を認めることができる（麻生編1984）。落盤は過去にも起きたが，生活をしている最中でも落盤が起き，生活に支障を来たし，けがや死亡事故もあったであろう。例えば長野県南佐久郡北相木村栃原岩陰では落盤石の下から幼児の骨2体が検出されている（香原1971）。このような事例から事故に遭遇して構築された埋葬墓も当然存在したであろう。

⑸　洞穴の先住動物

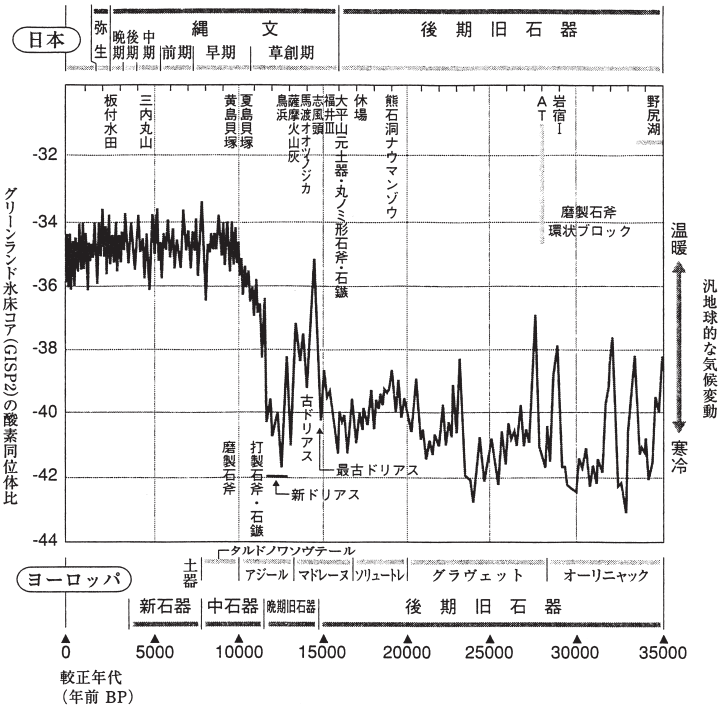
洞穴の最初の動物はカマドウマやトビムシ等の昆虫類やコウモリの鳥類である（高安1961）。

その後雨，風，寒さ，涼しさ，日陰そして他の獣の攻撃を避けて猛獣が住処とする。中国周口店は多くの洞穴があり，北京原人が発見されたことでも有名だが，獰猛なホラアナグマやハイエナ，トラなどの猛獣も住処として利用していたことが知られている。先史時代人が猛禽類を駆逐して住んでみると格好の場であることがわかり，以後占拠していくのであろう。

⑹　洞穴遺跡の穴居生活

洞穴は夏涼しくて，冬は暖かい寒暖の変化に合わせた快適な居住空間である。鍾乳洞での年間平均気温は15〜16度，湿度は80〜100パーセントであることが指摘されている（赤木1975）。洞外の落差の激しい年間気温と比較して安定していることが理解される。旧石器時代から縄文時代草創期にかけては概ね晩氷期で寒期のなかでも振幅の激しい気候であった（第3図）（春成2001）。先史時代の洞窟の形態は人工的に構築されたものではなく，自然に形成された環境に適応した居住地であり，人々は天から与えられた住家として大いに利用したのであろう[4]。ただし落盤石の除去や生活面の平坦化に伴う土のかき出しは当然行ったであろう。加えて生活上危険と思われる天井石の落下しそうなブロックは居住前に事前に除去していた可能性があろう。洞窟と岩陰（岩庇）では外気を遮断するには洞窟の方がより有効であり，雨露をしのぐ程度であるならば，岩陰でもおおむね防ぐことができる。一概には言えないが晩氷期は洞窟，後氷期は岩陰も利用した蓋然性が高いとする考えも頷ける。

洞穴遺跡の利用は近くに水場の確保が要される。水場が確保できない場合や水場から極めて遠い場合は良い洞穴であっても居住する場としては最上とは言えない。土器による雨水の溜め水や雪を熔かして貯水する知恵もあったであろう。水場は川の近くや崖下に豊富な湧水のある場が好まれる。また洞穴の開口する向きも大事である。やは



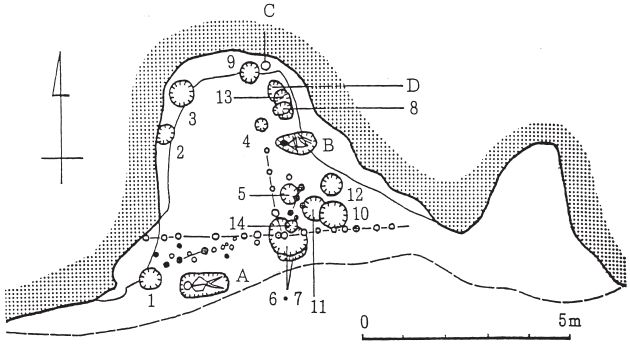
第3図　グリーンランド氷床コアの酸素同位体比からみた気候の変化（春成2001より）

り日が当たる南向きや東向きが良い。しかしそれほど条件に適った洞穴遺跡が開口している例は多いとは言い難い。

洞外に近い入口部は獰猛な動物から身をまもるための防御としての明かりと焔が効果的であった。炉址はその役割を担いながら食料を煮炊きし，時には食料を焼いたりする調理施設，灯りとりとしての採光の役割，寒さをしのぐ防寒の役割など多様な用途があった。雨日は洞外のテラスで行っていた作業の場を洞内で行うことも見逃すことはできない。洞外は雨日以外石器製作の場や動物解体場，木の実などを集積させた調理場であるとともに加工場も兼ねた多面的な場であったのであろう。

こうした場の機能は積極的に環境を改善して創りあげたと言うより，自然環境に適応した生活が行われていたものと類推される。しかし洞穴の奥行が十分あり，洞外テラスの平坦部が広い洞窟はそう多くはない。むしろ雨露をしのぐ程度の岩陰の方が多かったであろう。広島県帝釈峡遺跡群名越岩陰では岩陰の前方に柱穴を設けていたことから，雨や風，そして暑さを遮蔽する施設を設けていたのであろう。フランス，ニースのラザレー岩陰は約25万年前の前期旧石器時代に相当する。岩肌に沿って傾斜させて天幕を張った復原図が示されているので柱穴ないしは杭列が存在したのであろう（第4図）。

また縄文時代後期の例ではあるが，広島県帝釈峡遺跡群名越岩陰遺跡ではテラスを二分したかのよ

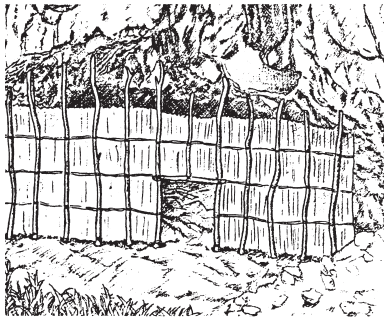


全体の遺構配置図

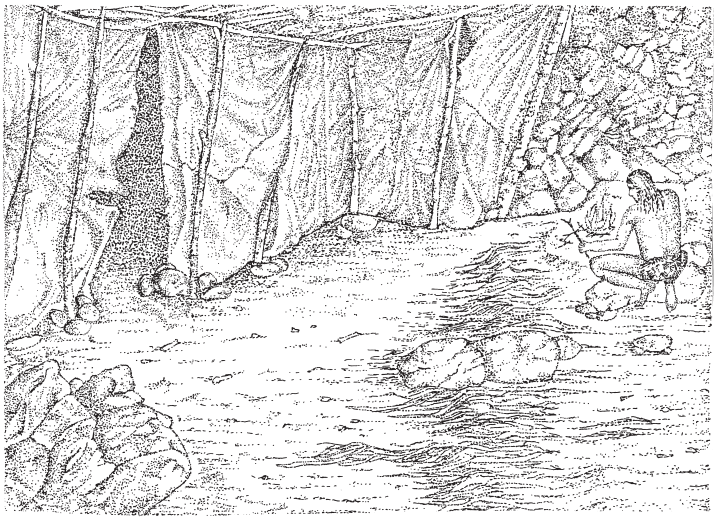
●…第3層の柱穴　⊕…第5層上面の柱穴　○…第6層下面の柱穴
◉…第9層上面の柱穴　A…1966–No.1 人骨　B…1969–No.2 人骨
C…1969–No.1　人骨　D…炉址

上図の柱穴列は右図のような小屋がけの為の柱を立てる穴であったと考えられている。これによって1軒分、1家族の居住区域が限定されたことが想定される。

なお、焼土や灰の堆積が柱穴列の外側に多く分布しており、日常的な生活の中心は外であったと思われる。



岩陰遺跡における小屋がけ復元想定図
（名越岩陰の場合）



第4図　（上・中段）広島県帝釈峡遺跡群名越岩陰の遺構配置図と復元想定図（下段）フランス，ニース・ラザレー洞窟内の蔽い（中越1997，勝部1976，フィオレンッエ・ファッキニー1993より）

うな間仕切りが認められている（中越1997）。このような例は妙音寺洞窟，弘法滝洞窟でも柱が構築されているが，縄文時代草創期の洞穴遺跡では今のところ検出されていない。

２．洞穴遺跡研究のはじまり

⑴　ヨーロッパの洞穴遺跡の研究成果

南西ヨーロッパにおいて前期旧石器時代から後期旧石器時代にかけて多く認められる。石灰岩が発達しているフランスのアラゴ洞窟は前期旧石器時代の石器群が出土している。加えて約45万年前の原人の頭骨が発見されている（リュムレー1976）。中期旧石器時代ではフランスのフェラシー岩陰やムスティエ岩陰に代表されるように７～５万年前の旧人が洞窟や岩陰を多く利用するようになる。このような様相は東ヨーロッパ，アジア，シベリアといったように広く見られる。該期は石器と共に埋葬墓が検出され，葬送の風習が芽生えた。後期旧石器時代ではオーリニャック岩陰やグラベッド岩陰そしてロジュリー・オート岩陰に代表される岩陰遺跡ほか開地遺跡にも居住するが，マドレーヌ期のラスコー洞窟やフォン・ド・ゴーム洞窟などにみられるように，洞窟は彩色の壁画や線刻画が描かれ，狩猟を対象とした信仰の場としても利用されたのであろう（マーリンガー1957）。

フランスの洞穴遺跡の成果は層位的な哺乳動物と出土遺物によって考えられたことから洞穴遺跡の層位的出土例によって編年が確立した点にある。例えばフランス人のラルテ, E によってホラアナグマの時代（中期旧石器時代），マンモスとサイの時代（中期旧石器時代），トナカイの時代（後期旧石器時代），オーロックスないしビゾンの時代（新石器時代）に区分された（ラルテ, E 1864）。さらにモルティエ, G によって層位的出土例にもとづく示準石器を中心としてムスチエ期，ソリュートレ期，オーリニャック期，マドレーヌ期に区分されたが，その主要石器はそのほとんどが洞穴遺跡から出土したものであった（モルティエ1864）。

このように南西ヨーロッパでは石灰岩の洞窟に旧石器時代から穴居している例が多く認められる。中には中期旧石器時代から洞窟に動物の壁画が描かれていることから，生活のみならず狩猟活動に伴う信仰の場として利用されたのであろう。

⑵　旧石器時代の洞穴遺跡

一方日本の洞穴遺跡はどうであろうか。洞穴遺跡に居住した旧石器時代に利用された洞穴遺跡は限られる。長崎県福井洞穴（鎌木・芹沢1960，柳田2013），泉福寺洞穴（麻生編1984），菰田洞穴（久村他2003），直谷岩陰（久村・川内野2007），広島県帝釈峡遺跡群観音洞窟（藤田・川越1965，潮見・藤田・川越1976），青森県尻労阿部洞窟（金井2012，渡辺・阿部他2013）等があげられる。

⑶　土器起源論と洞穴遺跡の研究成果

縄文時代草創期でも約16,000年前の土器出現期の洞穴遺跡は明らかではないが，少し遅れた約15,000年前の隆線文土器段階に目立って利用されることになることが今日良く知られている。しかし学史的に俯瞰すると次のようになる。

1929～1935年頃の縄文時代研究の大きな課題の一つとして縄文時代早期の研究が進められていた。そのことは縄文文化の起源を求める研究であるとともに最古の文化をめぐる問題でもあった。当時沈線文系の水戸式土器や田戸式土器が尖底土器で縄文式土器の中でも古く，ユーラシア大陸から伝播してきたものと捉えられていた（山内1932）。

1939年には板橋区稲荷台遺跡において関東ローム層中に食い込むようにして撚糸文系土器が出土したために，かなり古期の所産と推定された（白崎1941）。

1941～1946年頃の最古の縄文土器の編年研究は南北二系統論に代表されるように，東北日本の沈線文の土器群と西南日本の押型文土器や撚糸文土器が日本列島をあたかも二分し，並立していたとする考えがあった（江坂1942・1959）。しかしその二系統論は神奈川県夏島貝塚の層位的出土例（杉原・芹沢1957）によって編年的な新旧関係であることがわかり，南北二系統論は瓦解することになる。

このように最も古い縄文時代の研究は主として

最古の土器をめぐる論争でもあり，開地遺跡や貝塚遺跡から出土した遺物を対象としたものであり，良好な貝塚からの層位的出土例によって裏付けられた。

1960年撚糸文系土器は隆線文土器の発見によってその座を明け渡したが，その役割を大きく果たしたのは福井洞穴の発掘調査で，押型文土器を含む層より下位層で細石器と隆線文土器，爪形文土器がそれぞれ共伴して出土した（芹沢・鎌木1965）。他方本州地方では1960～1962年には新潟県室谷洞穴の上層で早期の撚糸文土器が，下層で押圧・回転縄文土器（多縄文系土器）が層位的に出土した（中村1964）。撚糸文土器より古い多縄文土器が認められ，併せて隆線文土器より後出であることが把握されたのも洞穴遺跡での成果の一つである。

こうした洞穴遺跡の層位的出土例は必ずしも類例が多いわけではない。むしろ山形県日向洞窟（柏倉・加藤1967，佐々木1971），火箱岩洞窟（柏倉・加藤1967，佐々木1971），新潟県小瀬が沢洞窟（中村1960）に見られるように，縄文時代早期撚糸文土器とは異なる隆線文土器，爪形文土器，多縄文土器等が最下層から出土した。このことは1956年と1957年に芹沢長介氏と山内清男氏が二度にわたり発掘調査された新潟県本ノ木遺跡において，石槍の一群と一緒に出土したひとかたまりの特殊な土器に対する山内清男氏の適切な評価は先の日向洞窟や古瀬が沢洞窟から出土した古期縄文土器の知見であったのであろう（芹沢・中山1953，山内・佐藤1960）。

その後長崎県岩下洞穴，同県泉福寺洞穴での層位的出土例は注目される。岩下洞穴では押型文土器以前に縄文時代草創期に相当すると思われる条痕文土器が出土している（麻生1968）。また泉福寺洞穴では押型文土器より下位に条痕文土器，押引文土器，爪形文土器，隆線文土器，豆粒文土器を主体とした層が連続して検出され，それを文化層として捉えた（麻生編1984）。

以上のことから縄文時代草創期の土器起源論に洞窟遺跡の果たした役割は大きかったと言える。ヨーロッパの洞穴遺跡が主として旧石器時代の解明に大きな力を発揮したのに対して，日本の洞穴遺跡は縄文時代初頭期の解明に大きな意義を見出したと言えよう。

⑷　洞穴遺跡における縄文時代草創期の遺物包含層

洞穴の土層堆積は火山噴火に伴う火山灰の降下，河川の氾濫による砂泥の堆積，天井からの落盤石，天井石や壁の亀裂による細かい剥落，人々が残した生活にかかわる残骸（炉址から掻き出された炭や焼土灰），食べかす等の堆積物で構成されている。その堆積の様相は一様ではない。

遺物は一定の深さで包含する例が多いが二次的な手を加えなければ，自然界の作用たとえば雨水や河の激流によって流れたり，風で飛ばされる。逆にあらたなる土砂が堆積されたりする場合もある。また霜柱によって遺物は持ち上げられる場合もある（御堂島・上本1987・1988）。人工的には踏みつけなどの圧力によって遺物が下方に押しさげられることもあったであろう（御堂島1994）。また入れ替わり洞穴を利用した場合，凸凹した部分を掻きとったり，ならしたりすることもあったであろう（萩原2002）。

居住の連続性と非連続性を考えるとより広い面積を調査するにこしたことはない。その場合，①出土遺物や炭化物が多く，川原石による石囲い炉の形成は一定度の長期居住が見込まれる。②短期居住地は出土遺物や遺構は貧相である。あっても地床炉（焼土）のみで，キャンプ的な短期居住であったのであろう。

洞穴は縄文時代草創期の人々が繰り返し連続的に利用したことは長崎県泉福寺洞穴の層位的出土例からも明らかで，11層から7層にかけて細石器文化層が2層，豆粒文文化層は10層を指しているが3層に細分されている。隆線文土器文化層は7・8・9層の3枚であるが8層は3層に細分されている。爪形文土器文化層は6層1枚であるが，第1・2洞では3層に細分されている。また押引文土器文化層では第1・2洞を中心として分布し，5層1枚であるが，4層に細分されている。条痕文土器文化層は4層1枚であるが，7層に細分されている。しかしその堆積は開地遺跡で

第１表　縄文時代草創期の洞穴遺跡

No.	遺　跡　名	所　在　地	立地	洞　穴　の　状　態								河　川
				標高	開口幅	奥域	高さ	河床面	形状	開口方向	岩種	
1	直谷(稲荷神社)岩陰	長崎県佐世保市吉井町	渓谷	73m	18.5m	3.7m	4.7m	5 m	岩陰状	南方向	砂岩	福井川
2	福井洞窟	長崎県佐世保市吉井町	渓谷	100m	15m	5 m	3 m	13m	岩陰状	西方向	砂岩	福井川
3	岩下洞穴	長崎県佐世保市松瀬町	段丘	200m	17m	5 m	1.5m	15m	岩陰状	南方向	砂岩	相/浦川
4	泉福寺洞穴	長崎県佐世保市瀬戸越町	丘陵	89.5m	20m	5 m	5.5m	27.5m	洞窟	南東方向	砂岩	泉福寺川
5	盗人岩洞穴	佐賀県伊万里市東山	山腹	360m	12m	6 m	5.2m		洞窟	南方向	砂岩	有田川
6	白蛇山岩陰	佐賀県伊西有田町	段丘	100m	上40m下８m	上６m			岩陰	東南方向	砂岩	有田川
8	二日市洞穴	大分県玖珠郡九重町	段丘	363m	6 m	20m	3 m以上？	9 m	洞穴	南方向	溶結凝灰岩	玖珠川・松木川
9	出羽洞穴	宮崎県西臼杵郡日之影町	渓谷	900m	8 m	11.2m	3.4m	7 m	洞穴	南方向	流紋岩	日之影川
10	帝釈弘法滝洞窟	広島県神石郡油木町	渓谷	320m	11m	6 m	7 m	11m	岩陰状	西方向	石灰岩	帝釈川
11	帝釈観音堂洞窟	広島県神石郡神石町	渓谷	500m	12m	9 m	8 m	14m	洞窟	南方向	石灰岩	岩屋谷川
12	寄倉岩陰遺跡	広島県比婆郡東城町	渓谷		50m	15m	20m	14m	洞窟状	南西方向	石灰岩	帝釈川
13	馬渡岩陰	広島県比婆郡東城町	渓谷	440m	30m	10m	10m		岩陰	東方向	石灰岩	帝釈川
14	名越岩陰遺跡	広島県比婆郡東城町	渓谷	420m	12m	7 m	5.5m	3.5m	岩陰	南方向	石灰岩	未渡川
15	帝釈大風呂洞窟	広島県神石郡神石町	渓谷	460m	11m	4 m	3.5m	57m	洞窟	南方向	石灰岩	岩屋谷川
16	豊松堂面洞窟	広島県神石郡豊松村	渓谷	420m	10m	7 m	6.5m	20m	洞窟	南方向	石灰岩	天田川
17	戸宇牛川岩陰	広島県神石郡			5.5m	1.0m		2.8m	岩陰		石灰岩	戸宇川
18	上黒岩岩陰	愛媛県上浮穴郡美川村	丘陵	395m	約６m	13m	20m	10m	岩陰状	北東方向	石灰岩	久万川
19	穴神洞穴	愛媛県東宇和郡城川町	台地	291m	5 m	＜９m	2 m	13m	洞窟	東方向	石灰岩	今井川
20	不動ガ岩屋洞穴	高知県高岡郡佐川町	盆地	250m	4 m	8 m	6 m		洞窟	南方向	石灰岩	尾川川
21	奥谷南遺跡	高知県南国市岡豊町	丘陵	24m	？	？	？	24m？	岩陰	南方向	チャート	物部川
22	古屋岩陰	徳島県那賀郡上那賀町	丘陵		16m	5 m	16m	70m	岩陰	南方向	石灰岩	那珂川
23	九合洞穴	岐阜県山県市美山町	段丘	180m	15m	30m	5 m	8 m	洞窟	南方向	石灰岩	武儀川
24	嵩山蛇洞穴	愛知県豊橋市嵩山町	丘陵	140m	3 m	60m？	1.3m		洞窟	南方向	石灰岩	豊川
25	石小屋洞窟	長野県上高井郡東村	丘陵	920m	3 m	3 m	1.3m	17m	洞窟	東方向	石灰岩	宇原川
26	荷取洞窟	長野県長野市戸隠村	段丘	650m	？	？		25m	？	南方向	石灰岩	
27	鳥羽山洞窟	長野県小県郡丸子町	丘陵		15m	15m		15m	洞窟	東方向	頁岩質角礫岩	依田川
28	栃原岩陰	長野県南佐久郡北相木村	段丘	960m	6 m？	5 m？	6.5m	13m	岩陰	南東方向	泥流	相木川
29	湯倉洞穴	長野県上高井郡高山村	山腹	1500m	4.5m	4.5m	2.5m	25m	洞窟	南西方向	溶結凝灰岩	湯沢
30	黒姫洞窟	新潟県北魚沼郡入広瀬村	山塊	500m	5 m	6.5m		100m	洞窟	北方向	安山岩	破間川
31	橋立岩陰	埼玉県秩父市上影森	渓谷	300m	20m以上？				岩陰	南方向	石灰岩	橋立川
32	大谷寺洞穴	栃木県大谷市大谷寺境内	段丘	160m	30m	13m	12m	4 m	洞窟	西南方向	凝灰岩	姿川
33	石畑岩陰	群馬県吾妻郡長野原町	渓谷	300m	40m	2 m			岩陰	南東方向		吾妻川
34	室谷洞穴	新潟県東蒲原郡阿賀町	段丘	218m	7 m	8 m	3 m	15m	洞窟	南方向	流紋岩	室谷川
35	小瀬ケ沢洞窟	新潟県東蒲原郡阿賀町	段丘	175m	1.5m	7 m	2 m	40m	洞窟	西方向	流紋岩	小瀬ケ沢川
40	八木鼻岩陰	新潟県南蒲原郡下田村		130m					岩陰		石英粗面岩	五十嵐川
41	塩喰岩陰	福島県耶麻郡西会津町	段丘	196m	13m	3.9m	4.4m	20m	岩陰	南方向	凝灰岩	安座川
42	火箱岩洞穴	山形県東置賜郡高畠町時沢	山腹(上洞)	260m	14m	3 m			洞窟	東南方向	凝灰岩	蛭沢川
43	火箱岩洞穴	山形県東置賜郡高畠町時沢	(下洞)		4 m	6 m	4 m	80m	洞窟	東方向	凝灰岩	蛭沢川
44	尼古第Ⅱ岩陰	山形県東置賜郡高畠町大字二井宿	山麓	350m			1 m		岩陰		凝灰岩	屋代川
45	神立洞窟	山形県東置賜郡大字阿久津	山腹	350m					洞窟	南方向	凝灰岩	蛭沢川
46	一ノ沢岩陰	山形県東置賜郡高畠町蛭沢	山腹	400m	8 m	8 m		40m	岩陰	西方向	凝灰岩	蛭沢川
47	一ノ沢Ⅱ岩陰		山腹	400m	？	？	？	？	岩陰	？	凝灰岩	蛭沢川
48	ムジナ岩陰	山形県東置賜郡高畠町	山麓	250m	？	？	？		岩陰	南方向	凝灰岩？	蛭沢川
49	大立岩陰	山形県東置賜郡高畠町	山腹	280m	13m	7 m			洞窟	南方向	凝灰岩	蛭沢川
50	日向洞窟(第１洞穴)	山形県東置賜郡高畠町竹森盆地	山麓	230m	4 m	9.5m	1.5m		洞窟	南方向	凝灰岩	大谷地湿原

層位と出土遺物	文　　献
2層細石器・尖頭器・爪形文土器，5～6層細石器・ナイフ形石器？	川内野篤・久村貞男他2008『直谷稲荷神社岩陰の発掘調査』平成19年度佐世保市埋蔵文化財発掘調査報告書
Ⅲ～Ⅸ層爪形文土器・細石器，隆線文土器・細石器	柳田裕三2013「史跡福井洞窟発掘調査概報」『佐世保市文化財調査報告』10
Ⅶ～Ⅸ層条痕文土器・爪形文土器・無文土器，石鏃・三角鏃・掻器	麻生優1968『岩下洞穴の発掘記録』佐世保市教育委員会
Ⅴ・Ⅵ層押引文土器・木葉形尖頭器・細石器，6層爪形文土器・細石器，7～9層隆線文土器，10層豆粒文土器・細石器，Ⅶ～Ⅹ層隆線文土器・細石器，豆粒文土器・細石器	麻生優編1984『泉福寺洞穴発掘記録』佐世保市教育委員会
石槍・櫛目文土器	柴元静雄・森醇一郎1965「第二章盗人岩洞穴遺跡」『西有田縄文遺跡』佐賀県教育員会
11層細石器	森醇一郎他1974『白蛇岩陰遺跡』佐賀県立博物館調査研究書1
8層条痕文土器・石鏃・尖頭器・掻器，9層条痕文土器・石鏃・尖頭器・有舌尖頭器？	橋昌信他1980『大分県二日市洞穴発掘調査報告書』別府大学付属博物館
尖頭器	鈴木治1967「8宮崎県見立出羽洞穴」『日本の洞穴遺跡』平凡社
14層無文土器・15層爪形文土器・刺突文土器・石鏃・石錐・貝制イ穿孔品・クチベニガイ穿孔品・ハイガイ穿孔品	中越利夫他1997「2．帝釈峡弘法滝遺跡（第11次）の調査」『広島大学文学部帝釈峡遺跡群発掘調査室年報』XII
20/21層無文土器，24～26層旧石器時代対応層，23層は早期押型文土器	川越哲志1976「帝釈観音洞窟遺跡の調査」『松崎寿和編帝釈遺跡群』
13層早期押型文，後期人骨50体以上	潮見浩1995『吉備考古ライブラリィ・3帝釈峡遺跡群』吉備人出版
4層無文土器・木葉形尖頭器・石鏃・カワシュンジ貝，5層オオツノシカ・安山岩製剥片	潮見浩1995『吉備考古ライブラリィ・3帝釈峡遺跡群』吉備人出版
柱穴遺構，炉跡，11層縄文早期押型文土器	川越哲志1976「帝釈名越岩陰遺跡の調査」『帝釈峡遺跡群』亜紀書房
5層縄文時代草創期末～早期	中越俊夫他2000「1．帝釈大風呂洞窟遺跡（第5次）の調査」『広島大学文学部帝釈峡遺跡群発掘調査室年報』XV
11層早期羽状縄文	福井万千・川越哲志1976「豊松堂面洞窟遺跡の調査」『帝釈峡遺跡群』亜紀書房
有舌尖頭器	川越哲志・乗安和二三1976「戸宇牛川岩陰の調査」『帝釈峡遺跡群』亜紀書房
Ⅶ～Ⅸ層無文土器～隆線文土器・有舌尖頭器	春成秀爾・小林謙一2009「愛媛県上黒岩遺跡の研究」『国立歴史民俗博物館研究報告』154
隆線文土器	長井数秋1979「穴神洞遺跡」『城川の遺跡』愛媛県東宇和島郡城川町教育員会
隆線文土器・無文土器・有舌尖頭器・石鏃	岡本顕児・片岡鷹介1969「3高知県不動ガ岩屋洞窟遺跡」『考古学集刊』4-3
細石刃・隆帯文土器・無文土器・木葉形尖頭器・局部磨製石斧・石鏃・有溝砥石	松村信博他2001『奥谷南遺跡Ⅲ』高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書63
無文土器？	江坂輝弥・岡本健児他1967「7四国地方の洞穴遺跡」『日本の洞穴遺跡』日本考古学協会洞穴調査委員会
隆線文土器・爪形文土器・押圧縄文土器・無文土器	澄田正一・大参義一1957『九合洞窟遺跡』名古屋大学考古学研究室紀要1
表裏縄文土器，押型文土器，ハマグリ	田中和三郎1942「嵩山洞窟の石灰洞（天然記念物）」『愛知県史蹟名勝天然記念物調査報告』20
Ⅶ・Ⅷ層隆線文土器・爪形文土器・押圧縄文・回転縄文土器・木葉形尖頭器・植刃	永峯光一1967「長野県石小屋洞穴」『日本の洞穴遺跡』
隆線文土器	小林達雄1963「長野県荷取洞窟出土の微隆起線文土器」『石器時代』6
表裏縄文土器	関孝一・永峯光一他2000『鳥羽山洞窟の調査』
表裏縄文土器・石鏃・拇指状掻器	大参義一1984『栃原岩陰遺跡発掘調査報告書―昭和58年度―』信州大学
最下層爪形文土器，円孔文土器・押圧文土器・表裏縄文土器・尖頭器・石鏃	永峯光一・関孝一・大原正義・広瀬昭弘他2001『湯倉洞窟―長野県上高井郡高山村湯倉洞窟調査報告―』
隆線文土器	佐藤雅一他2004『黒姫洞窟遺跡―第1期発掘調査報告―』入広瀬村埋蔵文化財報告1
④層黒褐色土層細隆起線文土器・爪形文土器・有舌尖頭器・石鏃	芹沢長介・吉田格・岡田淳子・金子浩昌1967「埼玉県橋立岩陰」『石器時代』8
3層下部表裏縄文土器，5層隆線文土器・円孔文土器	塙静夫1976「大谷寺洞窟」『栃木県史資料編考古1』
13層表裏縄文土器	巾隆之1988「63石畑岩陰遺跡」『群馬県史資料編1原始・古代1旧石器・縄文』
下層多縄文土器・石鏃・石斧・掻器	中村孝三郎・小片保1962『室谷洞窟』長岡市立科学博物館
隆線文土器・爪形文土器・押圧・回転縄文土器・有舌尖頭器・棒状尖頭器・石鏃	中村孝三郎1960『古瀬が沢洞窟』長岡市立科学博物館
多縄文土器・早期撚糸文土器	芳賀英一他1994『塩喰岩陰』東北自動車道発掘調査報告25福島県
隆線文土器・爪形文土器・多縄文土器・石鏃・石槍・掻器・石斧	佐々木洋治S46「火箱岩洞窟遺跡」『高畠町史別巻考古資料編』
Ⅶ・Ⅴ層細隆線文土器，爪形文土器，押圧縄文土器，石鏃・石槍・掻器他	柏倉亮吉・加藤稔1967「2洞穴の一例―火箱岩洞穴」『日本洞穴遺跡』
爪形文土器・押圧縄文土器・無文土器・木葉形尖頭器	加藤稔1959「山形県東置賜郡高畠町尼子第Ⅱ岩陰」『山形考古れんらくし』1
隆線文土器・押圧縄文	相田俊雄1961「山形県高畠町蛭沢神立洞穴発掘調査概要」『山形考古』8
5層隆線文土器・4層隆線文・無文土器・爪形文土器・多縄文土器	加藤稔・佐々木洋治1962「山形県一ノ沢岩陰遺跡」『上代文化』31・32
	加藤稔・佐々木洋治1962「山形県一ノ沢岩陰遺跡」『上代文化』31・32
無文土器	佐々木洋治S46「ムジナ岩岩陰遺跡」『高畠町史別巻考古資料編』
Ⅶ層隆線文土器，爪形文土器，石斧，矢柄研磨器	佐々木洋治1976～1978『山形県高畠町大立洞穴1～3次調査概報』山形県立博物館
第4層隆線文土器・爪形文土器・押圧縄文土器，石鏃・木葉形尖頭器，植刃・錐	柏倉亮吉・加藤稔1967「2洞穴の一例―火箱岩洞穴」『日本洞穴遺跡』

も時期的に近接している遺物は，条件がよほど良好でないと遺物の垂直分布は層を違えて出土しにくい。

柏倉亮吉，加藤稔両氏によれば山形県火箱岩洞窟下洞では第Ⅶ層に細隆起文土器，第Ⅵ層が無遺物，第Ⅴ層微隆起文土器，第Ⅳ層が短縄文土器，爪形文土器，第Ⅳ層と第Ⅲ層の間層から無文土器，縄文土器が出土している層序模式表を発表している（柏倉・加藤1967）。他方日向第Ⅰ洞窟では厚さ24cmの暗褐色の砂質土壌層の第4層中から隆起縄文土器，無文土器，爪形文土器，絡條体圧痕文土器，押圧縄文土器が出土している。これらの遺物を「群」として括って取り扱っている（加藤1967）。一ノ沢岩陰ではⅠ類の隆線文土器群，Ⅱ類の爪形文土器群，Ⅲ類の押圧縄文土器群が第4層の黄褐色粘質土層中から出土している（加藤・佐々木1961）。もっともⅠ類は4層の下層に位置する5層の黄灰粘質土層からも出土している。またⅣ類の絡條体圧痕文土器群，Ⅴ類の櫛目文土器群，Ⅵ類の無文を主体とした土器群は第4層から第5層にかけて出土している。このことから佐々木洋治氏は「出土層序と土器の文様，形態の特徴から隆線文土器から無文土器までの編年を構築している」と指摘する（加藤・佐々木前掲）。火箱岩洞窟と日向洞窟，一ノ沢岩陰とは出土状況が大きく異なっている。このような点は新潟県小瀬が沢洞窟下層でも同様に認められる。

縄文時代草創期の土器形式は時間的に推移しているとしても極めて短期間に変化していたために堆積層が薄かったことが類推される。

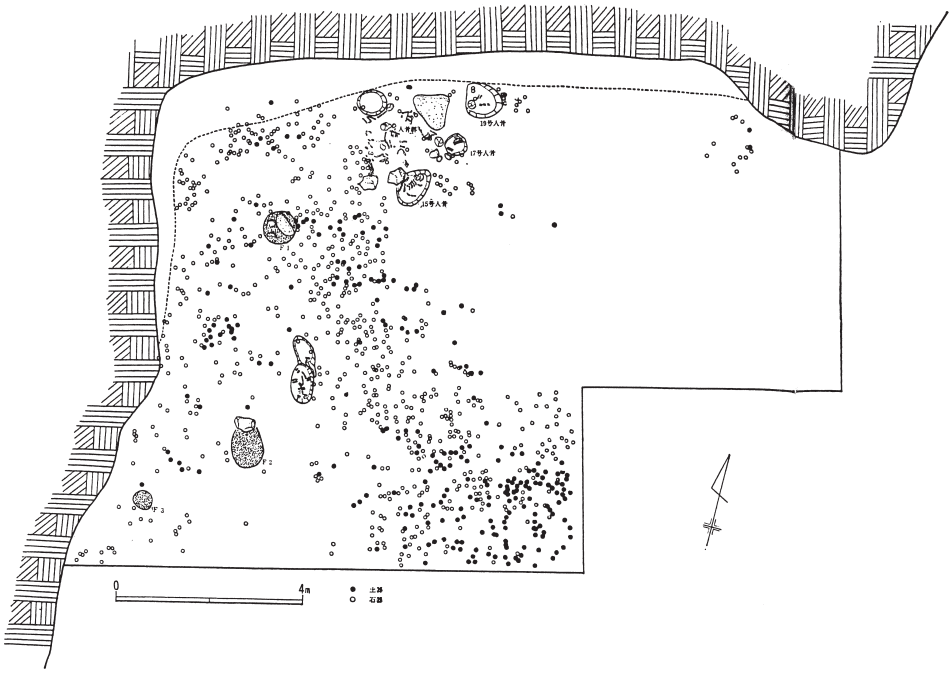
洞穴遺跡では良好な出土例が層位的に認められる。しかし文化層は必ずしも一定した層厚ではなく，薄層も多々見られる。上層の文化層の遺物や下層の文化層の遺物が混入する場合がある。遺物の垂直分布はある一定の深さに収束するが，上下に拡散する遺物も多い。その場合収束した深さが生活面として捉えられる[5]（鈴木・矢島1976，小林1998）。

傾斜した層であるならば，発掘時は微妙に上層と下層の文化層が平面的に捉えられたとしても垂直分布を組み込むと出土層位に入り込まない場合もある。それをどのように読み取るのか難しい判断が要される。最新の注意を払って文化層の時期決定がなされる。また多層位にまたがって同系の土器形式が認められる場合であっても層位的な撹乱が無い場合は時期的な前後関係として捉えられるであろう。下層と上層の出土遺物が様相の異なった場合は新たなる文化層と認定される。しかるに系統の異なる遺物が伴出した場合，新たなる文化層と呼称すべきか否かの判断は総合的な視点が必要であろう。

3．洞穴遺跡から見た場の機能

⑴　遺物・遺構の分布をとおした場の機能の把握

麻生優氏は長崎県佐世保市岩下洞窟の遺物の原位置を記録化し，雨だれラインを境として洞穴の内側を洞内，外側を洞外として住み分けがあったものと捉え，遺物分布と遺構，そして洞窟の中で，人間行動を捉えようとした（麻生1968・1969・1975）。岩下洞穴5層の押型文土器期では奥壁側に土壙墓，南側のテラス部に比較的多くの遺物が分布し，土壙墓と遺物分布に介在するようにして炉址が形成されていた。これは明らかに場のあり方を考えた生活空間を示すものである（第5図）。泉福寺洞穴では調査区から出土した遺物を全点ドットし，時代毎に遺物がどのように分布しているのか原位置論に基づく方法が重視された。そのことはとりもなおさず，各期の洞穴利用の在り方が時期によって一様でないことがわかる。隆線文土器や豆粒文土器の文化層を見てみると第2洞奥は遺物の分布が希薄になっている。また豆粒文土器は第1洞で遺物が見られるが，隆線文土器・爪形文土器は一段と希薄になり，対して第2洞外，第3洞内に稠密に分布している。しかし次の押引き文土器や条痕文土器になると第3洞が希薄になり，第1・2洞外テラスに集中するようになっている。このように見ると第1・2洞内は縄文時代草創期の全時期をとおして遺物分布は希薄であった。その空白部が何を意味するものかわからないが，薄暗い洞奥は得てして埋葬の場にすることが多いことが知られている。大分県朝地町大恩寺稲荷岩陰では縄文時代早期であるが，洞



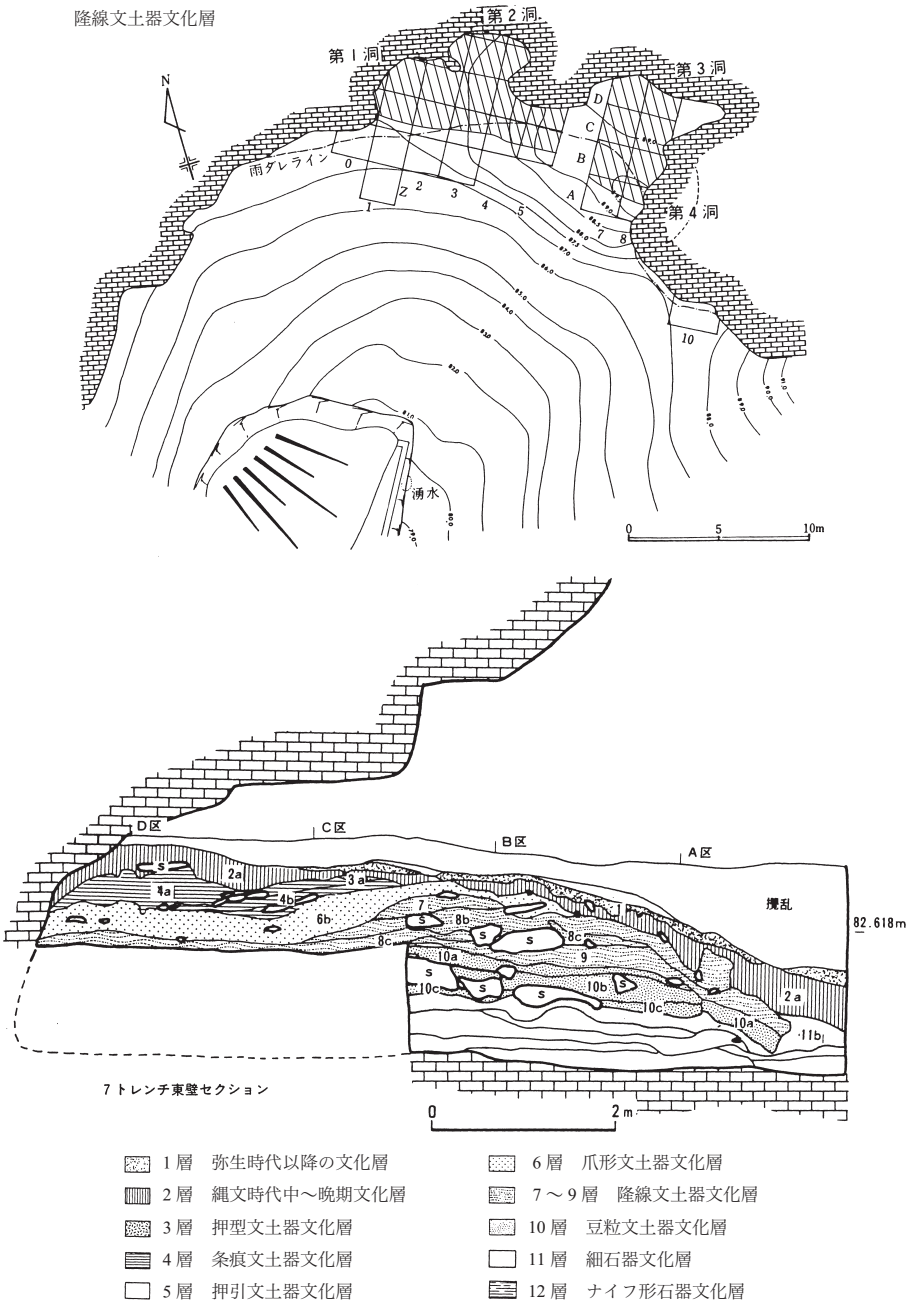
第 5 図　長崎県岩下洞穴縄文時代早期押型文土器文化の土壙墓・炉址と遺物分布（麻生1968より）

奥壁に沿って屈葬され 8 体の人骨が列状に配され，埋葬人骨の手前洞外方向に集石遺構 9 基が認められる（賀川1982）。賀川によれば⑴灰をつめた座臥屈葬した小児埋葬，⑵胸部に抱石した埋葬，⑶足のくるぶしをはずして胸部の肋骨をはずした部位に配した埋葬よりなるという。集石遺構は埋葬と関連させているが，厨房施設の可能性も考えられる。

⑵　集団の拠点か，家族の使用か

洞穴遺跡がどのように利用されたのか，解明するのは大変難しい。それは洞穴遺跡を全面的に発掘した例が少ないからだ。しかし少ない知見から推しても長崎県泉福寺洞穴や福井洞穴は家族で使用する細石器の量を完全に超えている。とりわけ泉福寺洞穴 8 c 層は隆線文土器段階であるが（第 6 図），細石刃は5,653点，細石核はブランクを含め246点と極めて多い（第 2 表）。つまり泉福寺洞穴は当該地域の石器製作の集団が細石核を製作して消費地に搬出する共同作業場とも推定されよう。他方福井洞穴は石囲いを用いた炉跡が随所に構築されている（柳田2013）。泉福寺洞穴では焼

写真 1　長崎県泉福寺洞穴（佐世保市教育員会提供）



第6図　長崎県泉福寺洞穴の隆線文土器文化の分布範囲とその文化層（麻生編1984より）

土址のようなものは認められたが石囲いのような炉跡は認められていないところから，石器製作場としての泉福寺洞穴より福井洞穴は居住を主体としたものであろう。また帝釈峡遺跡群の帝釈名越岩陰遺跡について，中越俊夫氏は竪穴住居と洞窟のテラスの面積がほぼ同面積のものが多く，1家族ないし洞穴の面積が多くても2家族程度のものと類推し，結果として，帝釈峡遺跡群の1洞穴な

第 2 表　長崎県泉福寺洞穴における出土石器の点数（麻生編1984より）

第 3 洞　7・8 トレンチ

主要遺物	層位		ナイフ形石器	細石刃	細石刃核	ブランク	スポール	スクレイパー	彫器	使用痕ある剥片	礫器	石斧	敲石	磨石	剥片	砕片	石核	原石	石鏃	石匙	尖頭器	砥石	その他	計	土器
	表土	数													1									1	2
		%													100.0									100.0	
弥生以降	1	数						7		12		1		1	89	68	1		6					185	41
		%						3.8		6.5		0.5		0.5	48.1	36.9	0.5		3.2					100.0	
中～晩期	2a	数		(99)	(1)		(2)	15	1	23					336	192	4		5				1	577 (102)	30
		%						2.6	0.2	3.9					58.2	33.3	0.7		0.9				0.2	100.0	
	2b	数						1							5	5			1					12	
		%						8.3							41.7	41.7			8.3					100.0	
	2c	数		(64)			(4)			3					138				1					142 (68)	
		%								2.1					97.2				0.7					100.0	
押型文	3a	数								1					2	6								9	
		%								11.1					22.2	66.7								100.0	
条痕文	4a	数		(1)				1							5	4			1					11(1)	
		%						9.1							45.4	36.4			9.1					100.0	
	4b	数		(24)	(2)		(2)	3	2	4					71	144			10				1	235 (28)	7
		%						1.3	0.9	1.7					30.2	61.3			4.2				0.4	100.0	
爪形文	6b	数		420	22	7	23	33	5	75	3	1			472	634	13				1		2	1.711	58
		%		24.5	1.4	0.5	1.4	2.0	0.3	3.5	0.2	0.1			27.7	37.2	0.9				0.1		0.1	100.0	
隆線文	7	数		276	4	6	10	6	1	31	2			1	356	289	11					1	1	995	47
		%		27.7	0.4	0.6	1.0	0.6	0.1	3.1	0.2			0.1	35.9	29.0	1.1					0.1	0.1	100.0	
	8a	数		8	3	1		1							14	5								32	7
		%		25.0	9.4	3.1		3.1							43.8	15.6								100.0	
	8b	数		504	12	3	10	14	1	42	5				540	546	9						41	1,727	117
		%		29.1	0.7	0.2	0.6	0.8	0.1	2.4	0.3				31.3	31.6	0.5						2.4	100.0	
	8c	数		5,949	182	64	102	116	4	323	4				5,803	11,591	23	1				2*	80	24,244	436
		%		24.5	0.8	0.3	0.4	0.5	0.03	1.3	0.03				23.9	47.8	0.1	0.02				0.02	0.3	100.0	
	9	数		2,153	128	34	43	44	2	97	4	4			2,185	4,353	19						47	9,113	322
		%		23.6	1.4	0.4	0.5	0.5	0.02	1.1	0.04	0.04			23.9	47.8	0.2						0.5	100.0	
豆粒文	10a	数		1,248	78	11	29	53	2	90	2	1		2	1,103	3,370	14	1					17	6,021	213
		%		20.7	1.3	0.2	0.5	0.9	0.03	1.5	0.03	0.005		0.03	18.3	56.0	0.2	0.005					0.3	100.0	
	10b	数		429	31	7	11	15	1	125	1				357	1,054	1						11	2,043	46
		%		21.0	1.5	0.3	0.5	0.7	0.1	6.1	0.1				17.5	51.6	0.1						0.5	100.0	
	10c	数		177	52	6	11	24	1	31	3	1			395	591	6						2	1,300	27
		%		13.6	4.0	0.5	0.8	1.8	0.1	2.4	0.2	0.1			30.4	45.4	0.5						0.2	100.0	
細石器	11a	数		16				2							11	16								45	
		%		35.6				4.4							24.4	35.6								100.0	
	11b	数		7	2	1	3	2		10					19	25	1							70	
		%		10.0	2.9	1.4	4.3	2.9		14.3					27.1	35.7	1.4							100.0	
	計	数		11,187 (188)	514 (3)	140	242 (8)	337	20	867	24	8		4	11,902	22,893	102	2	24				207	48,473 (199)	1,353
		%		23.1	1.1	0.3	0.5	0.7	0.04	1.8	0.06	0.02		0.01	24.5	47.2	0.2	0.01	0.06				0.4	100.0	

いし岩陰には 1 家族の使用と推定している（中越 2001）。また栗島義明氏も洞穴・岩陰の面積は住居址 1 件分相当の面積が平均と推定する（栗島 1997）。もっとも上記の検討は縄文時代草創期ではなく，縄文時代後期を対象としたものなので比較にはなりにくい。縄文時代草創期の出土遺物はなおさら僅少になるので洞穴のテラスの面積と比例しない。

このように見ると洞穴遺跡が集団か家族の使用を解明する場合，洞穴遺跡の面積，出土遺物や炉跡の数や規模，埋葬墓の状態などで判断しなければならないが，洞穴遺跡の外形・出土遺物の特徴や量的関係から判断しなければならないであろう。加えて狩猟時のキャンプ的な洞穴使用も推定される。また縄文時代草創期に画然化していたか未解明であるが，葬送の場としての利用も後出の時期では認められる。

⑶　墓地としての洞穴利用

洞窟遺跡は雨だれラインより内側を洞内と呼び，雨だれラインから外側の平坦な面が急激に傾斜するエリアまでを洞外と呼称されている点は触れた。縄文時代草創期の例ではないが，早期の段階で洞内の奥壁際は暗い奥壁部を埋葬の場とした例が目立つ。洞奥は暗い点も大きいが洞穴の傾斜が急であると立ち上がって行動できない点も埋葬地としたのであろう。

洞穴をそのまま埋葬地として利用した例は時代が後出になるが，縄文時代後期の広島県帝釈峡寄倉岩陰 3・4 層で 2 か所の集積墓地があり， 1 か所は成人22体， 2 m 離れて幼児24体分以上の改葬された人骨群が認められている（帝釈峡遺跡群発掘調査団1976）。また大分県枌洞穴でも縄文時代早期から後期にかけて66体の人骨が埋葬されていた。早期 9 体，前期40体，後期17体が埋葬されていた（賀川他1977）。弥生時代中期前半の群馬県吾が郡吾妻町の岩櫃山鷹ノ巣岩陰にみることができる。22点の弥生時代中期前半の壺形土器がまとまって人骨と共に洞奥から出土している（杉原1967，梅沢・柿沼1986）。標高802m の頂上から20m 下がった岩床の切りたった所に認められる。これらの岩陰は埋葬墓地と考えられている。このような例は長野県鳥羽山洞穴にあり，洞内には古墳時代の人骨が多く散乱し，葬所の可能性が指摘されている（関・永峯2000）。なお千葉県大寺山洞穴で複数の木棺が検出され，埋葬墓地の蓋然性が高い（麻生・岡本他1996，岡本1996）。

かくて縄文時代草創期の段階まで遡って墓地が形成されていたかどうか発掘調査が待たれる。

4．洞穴遺跡からみたランドスケープ

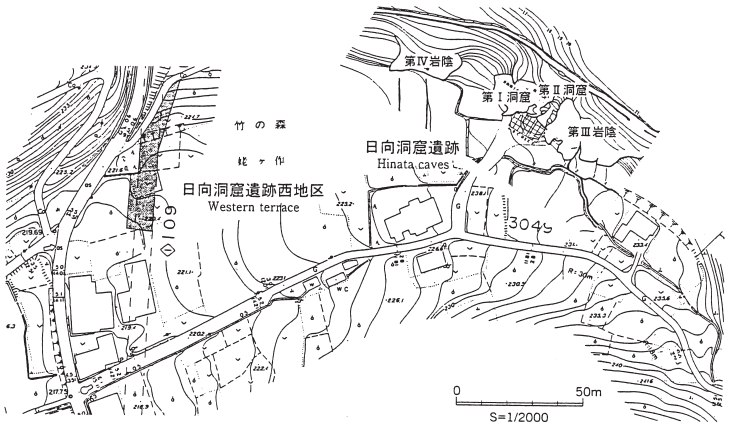
⑴　洞穴遺跡群と開地遺跡

縄文時代草創期の人々は土器を保有した段階から定住への方向性を模索したとしても縄文時代早期以降の集落にみられるような定住化を実現したわけではない。洞穴の形状によっては一定度の小集団が利用したものであり，期間定住であるならば洞穴遺跡は極めて居心地の良い環境であったのであろう。しかし人びとの生活は寝起きするだけではない。石器づくりや，土器づくり，狩猟具の組み立てや修理，木の実の保存食料，狩猟をしてきた獲物の解体，そして墓地や祭りなどいろいろなスペース（場）が必要となる。それらの作業が同一時に行われるということでないにしても洞穴の前方に突き出た一定度の広さを持つテラスが要される。つまり洞穴遺跡は良好なテラスの存在が重要と言えよう。しかしそのような良好なテラスをもつ洞穴遺跡は少ない。

縄文時代草創期の開地遺跡をみると，かなり低地へ進出している。つまり川辺や湿地の近くで生活をしている原風景を想像することができよう。例えば東京都前田耕地遺跡の事例からサケ・マス漁と密接にかかわっている蓋然性が高い（東京都立埋蔵文化財調査センター他1992）。しかし一年をとおして捕獲はできないので，保存食料としてのスモークづくりによってまかなうための作業が必要になったのであろう。

このように考えると洞穴遺跡とテラスの関係が大きいが，テラスが発達していない洞穴でも，至近距離に川辺に近い好適な場があれば河川漁労を含めた各種作業する場としての開地遺跡が形成されたのであろう。洞穴遺跡は生活の中心的な場にはなるが，狩猟や漁労，そして木の実等の採集は洞穴から離れたテリトリーで必要に応じて作業が行われたのであろう。

洞穴遺跡と開地遺跡の関係は山形県日向洞窟と日向洞窟西地区の開地遺跡の関連が重要であろう。開地遺跡では膨大な縄文時代草創期の石器が出土しており，しかも竪穴状遺構やデポ等各種遺構が検出されている。この開地遺跡は先に触れた



第７図　山形県日向洞穴と西地区の位置（佐川・鈴木2006より）

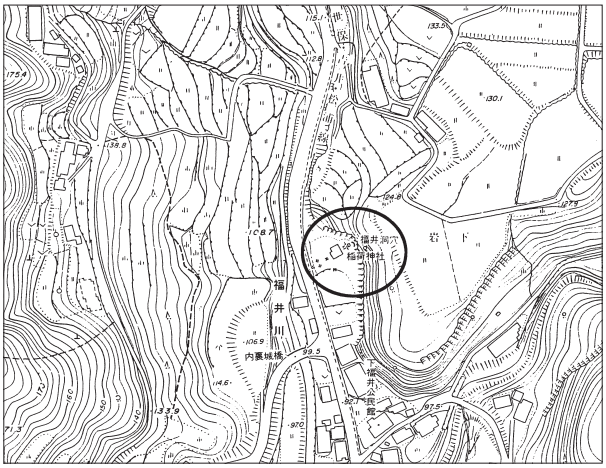
ように，洞窟と100mの至近距離にあり，日向洞窟遺跡のみで生活が終始していたとする視点は再考を余儀なくされた（第７図）（佐川・鈴木編2006）。洞窟の背後には大谷地大湿原地帯があり，飲料水の確保，狩猟活動，漁労活動そして植物質食料の採集が行われたであろう。このように見ると長崎県福井洞窟周辺でも神社の南側の緩斜面や現駐車場での試掘調査によって旧石器時代から縄文時代にかけての遺物が出土している点で福井洞窟との関係が深い。加えて洞窟上部に３か所にグリッドを設定し，調査したところ安山岩製の剥片や原石が出土している（柳田・中西・川内野2009）。東側は農地整備により平坦な地形に開墾されているが，洞窟の上は木立がなければ，極めて見晴らしのきく場所と言える。今後福井洞窟のヒンターランドとして安山岩の原産地の特定が必要であろう（第８図）。福井洞窟に近い直谷稲荷神社岩陰（直谷岩陰では洞外地区が調査されている（川内・久村2007・2008）。岩陰の南側に位置する熊野神社ないし吉井町立北保育園まで遺構や遺物が広がっているか今後試掘調査を行って確認する必要があろう。また岐阜県九合洞窟は南端に武儀川が流れている（第９図）（澄田･安達1967）。この川が先史時代どのように流れていたか検討しなければならないが，洞窟の東側は平地が弧状に残っている。川を越えた南側にもわずかに平坦面を有しているところから，試掘調査によって洞窟関連の遺物が出土する可能性があろう。また愛媛県上黒岩岩陰の西側は１トレンチＥ区の南側にある住宅ないし庭先は平坦面が広がっており，旧石器時代を含めて岩陰から離れた地域まで遺物の出土が推定される（第10図）。

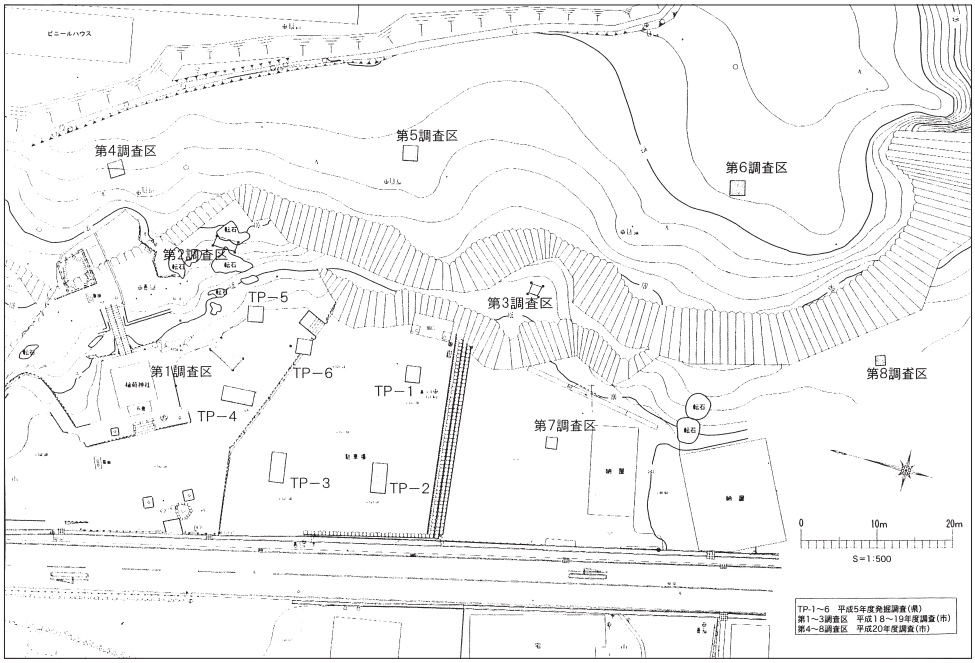
このようにみてみると今までの洞穴研究は洞窟や岩陰のみを対象にしていたが，今後洞穴をとりまく周辺地域まで調査の目を注ぐ必要があろう。

⑵　洞穴遺跡から出土した自然遺物

河村善也氏によれば広島県帝釈峡遺跡群観音堂洞窟26層からはタヌキ，シカ，ネズミが出土している。25層下部からはヒグマ，タヌキ，テン，シカ，ネズミ，モグラ，コウモリ，ノウサギ，モモンガ，ムササビ，ネズミの他にナウマンゾウの臼歯が出土していることが指摘されている（河村1982）。またイノシシに比べてシカの量が多く，ニホンムカシジカないしニホンジカである（河村1980）。縄文時代草創期の自然遺物は極めて少ない。わずかに帝釈峡遺跡群馬渡岩陰最下層の５層でオオツノジカと剥片，４層からはオオツノジカとカワシュジュガイが出土している（河瀬1977）。なお４層は無文平底土器に伴って有舌尖頭器，石鏃が出土しており，縄文時代草創期に対比されるかもしれない。また河村善也氏によって観音堂洞窟26層からはタヌキ，シカ，ネズミが出土していることが確認されている。

豊松堂面洞窟では13層から表裏縄文土器片が出土している。ここでもカワシュジュガイが伴っている。縄文時代早期末にはやや大きめのカワニ





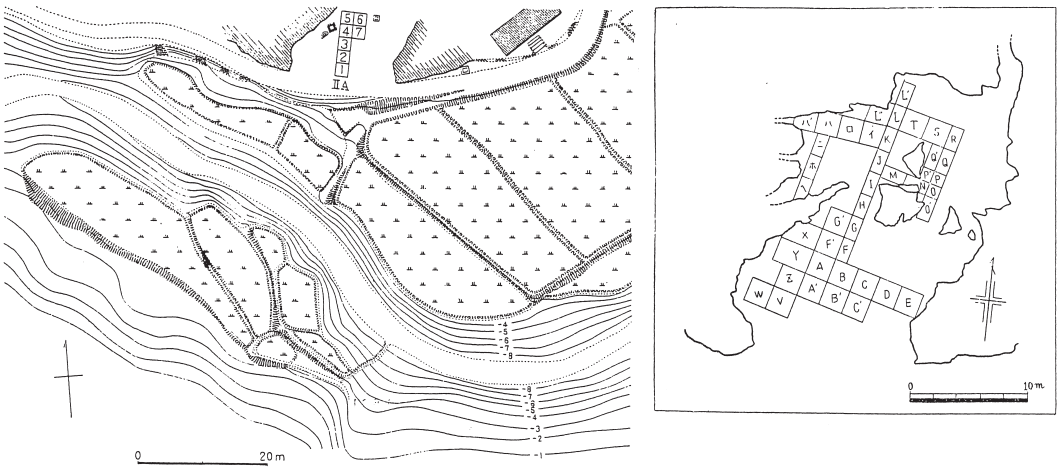
第８図　長崎県福井洞穴とその周辺の地形
（久村・川内野・早田2007，久村・川内野・杉山2008，久村・柳田・西田2010より）

ナの貝が出土している（潮見・河瀬1980）。

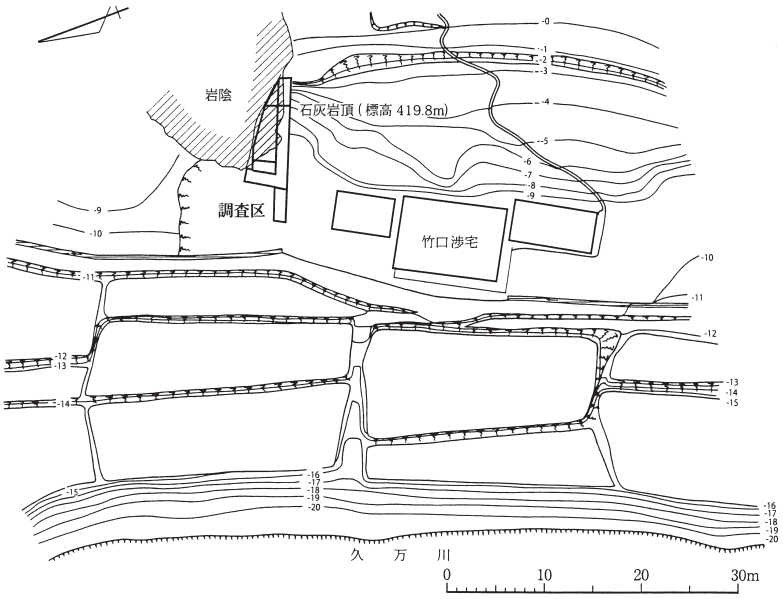
⑶　洞穴をとりまく地理的，生態的な様相の把握

洞穴は南面に開口し，日照が十分得られる高台に存在することが理想的な居住の場である。日差しがあたる洞外テラスでは６に後述するようなさまざまな場として利用されていたことが考えられる。洞外には充分なテラスが発達し，近接して水が得られる湧水ないし小河川，あるいは湿地の存在が望ましい。日常的な飲料水の確保が重要であろう。中程度の河川や規模の大きい湿地があれば淡水産の魚を対象とした漁労活動，狩場や植物質食料が確保できるような周辺環境の存在も大事である。

しかしそのような好条件を備えた洞穴は決して多くはない。というのは南西ヨーロッパのフランスのレゼジー周辺やスペイン国境のピレネー山脈



第９図　岐阜県九合洞穴周辺の地形と洞穴（澄田・安達1967，小川1950より）



第10図　愛媛県上黒岩岩陰とその周辺の地形（春成・小林2009より）

周辺に見られる丘陵は全体的に白い石灰岩が広くむき出しになっている。日本列島はその上に黒土が堆積し，樹木が密生し，ところどころに岩場をのぞかせるような状態であることから石灰岩が広く認められるというイメージはない。それ故群集する洞穴群の存在を検出することは難しい。つまり開地遺跡とは異なり，好条件を兼ね備えた洞穴は少ない。そのために洞穴遺跡がすべて定住化した居住施設であると確定するのは早計であろう。長野県上高井郡高山村湯倉岩陰は標高1,500m の高地にある（永峯・関・大原・広瀬2001）。年平均気温８度以下という（永峯他前掲）。そうであるならば一定の季節を選んで居住していたか。あるいはマタギのような猟師が狩猟をする時に，一時的この岩陰を拠点としていた可能性があろう[6]。

5．洞穴遺跡群からみた縄文時代草創期のテリトリー

⑴　洞穴群について

洞窟や岩陰が群をなしているのは山形県日向洞窟で，3穴が50mの範囲に扇状に配され，加えて第Ⅰ洞の上に第Ⅱ洞が認められる（第11図）。また3穴が連結した長野県鳥羽山洞穴，長崎県泉福寺洞穴がある。鳥羽山洞窟では古墳時代に葬所として利用したが，縄文時代草創期では連結した洞窟ないしそのテラスを利用したのであろう。3穴の幅は25mを測る。泉福寺洞穴では30mのアーチ状の岩肌に3穴が形成され，洞穴のテラス南端は擂鉢状となって谷に落ち込んでいる。そこには湧水があり，調査時点でも生活水として利用されていた。相ノ浦川から少し離れているので，泉福寺洞穴の人々も当然湧水を利用していたであろう（第6図）。

山形県尼子岩陰は屋代川上流域に4か所の岩陰で構成されているが第Ⅱ岩陰が中心である（第11図）。

このように洞穴群といっても洞穴が連結した例と至近距離に位置した例よりなる。とりわけ後者は一河川流域の洞穴を利用した例と等高線を超えた至近距離にある洞穴が群をなす例である。

至近距離にある洞穴は同一時期のものならば，無関係とは思えない。同集団による領域（テリトリー）内での移動が考えられよう。加えて拠点的な場とキャンプ的な場の使い分けも推定されるところである。

長崎県福井洞穴と泉福寺洞穴は直線距離にして約9kmである（第12図・第3表）。久村貞男や柳田裕三両氏は佐世保市内に群集する20か所の洞穴群を拠点と衛星洞穴の関連で理解しようとし，相浦川水系の拠点が泉福寺洞穴→岩下洞穴→下本山岩陰に移動している点を指摘している（久村・柳田・西田2010）。今後石器の母岩，個体別資料の検討をとおして遺跡間の石器接合資料に期待したい。

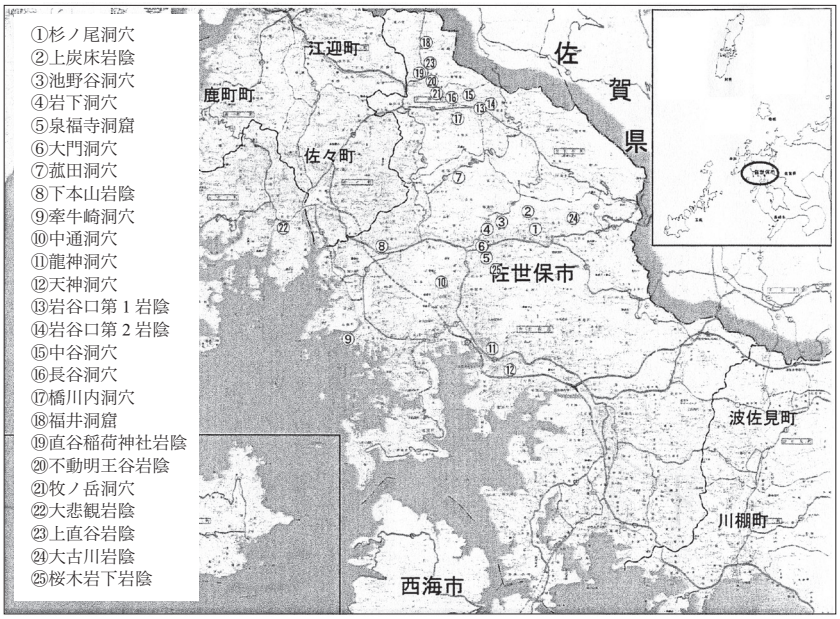
凡例：▲洞窟　◭岩陰　■洞窟・岩陰

第11図　山形県高畠洞穴遺跡群の分布
（佐々木1996を改変）

6．縄文時代草創期の洞穴遺跡群

日本列島において縄文時代草創期の文化層を有する洞穴遺跡をみるといくつかのグループに分けて捉えることができよう。

⑴山形県置賜郡に所在する日向洞窟を中心とした洞窟群は佐々木洋治によって高畠洞穴群と呼称したグループである（佐々木1996）。佐々木によれば高畠町には30か所の洞穴が確認され，標高240～304mに7遺跡の縄文時代草創期の洞穴が4kmの範囲に集中して分布しているという（佐々木前掲）。主な洞穴は⑴尼子洞窟，⑵一の沢洞窟，⑶神立洞窟，⑷ムジナ岩岩陰，⑸火箱岩洞窟，⑹日向洞窟，⑺大立洞窟である（第11図）。これらの洞穴遺跡群の中で隆線文土器の出土が充実しているのは日向洞窟で，一の沢洞窟は多縄文土器が顕著と言える。おそらく今後他の洞穴遺跡を完掘したとしてもそれらの洞穴の特徴は大きく変更す

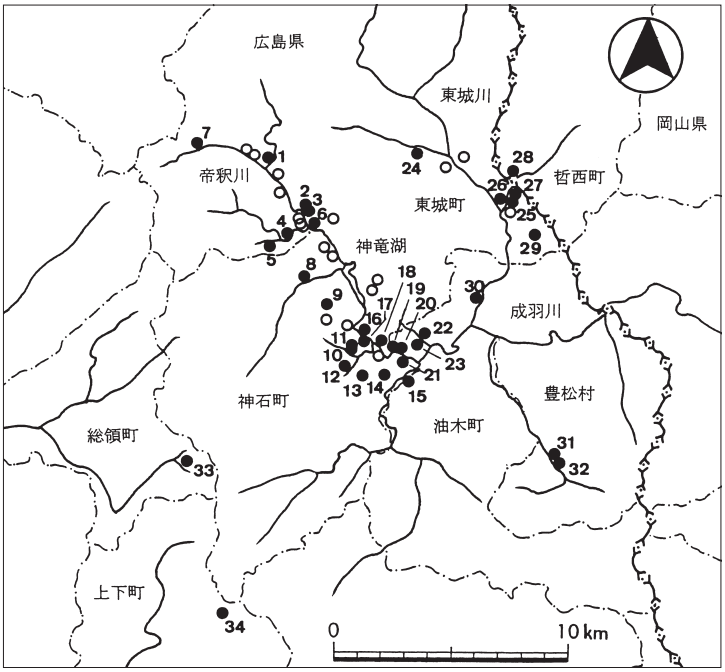


第12図　長崎県佐世保洞穴遺跡群の分布（久村・栁田・西田2010より）

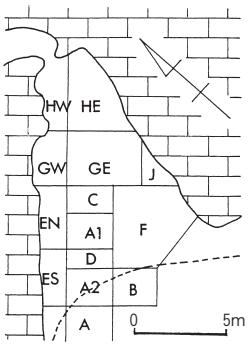
第３表　長崎県佐世保市の洞穴遺跡とその水系（久村・栁田・西山2010より）

No.	遺跡名	流域河川	旧石器			縄文									弥生	古墳	古代	中世	近世
			AT前	AT後	細石器文化期	草創期		早期		前期		中期		後期		晩期			
1	杉ノ尾洞穴	相浦川						●											
2	上炭床岩陰	相浦川								●		●		●	●	●	●		
3	池野谷洞穴	相浦川												●？				●?	
4	岩下洞穴	相浦川			●			●	●●	●●		●	●	●	●	●		●		●
5	泉福寺洞窟	相浦川	●？	●	●	●●●●		●				●	●	●			●	●	●	●	●
6	大門洞穴	相浦川								●		●	●	●	●	●	●	●			
24	大古川岩陰	相浦川										●									
7	菰田洞穴	相浦川支流小川内川		●	●？			●		●											
8	下本山岩陰	相浦川								●●	●●	●	●	●	●			●			●
9	牽牛崎洞穴	相浦川　海食洞																	●		
10	中通洞穴	佐世保川													●						
25	桜木岩下岩陰	佐世保川										●		●							
11	龍神洞穴	佐世保川																	●		●
12	天神洞穴	日宇川	●					●	●	●	●	●	●	●	●		●	●			
13	岩谷口第１岩陰	佐々川						●		●	●			●	●		●	●			
14	岩谷口第２岩陰	佐々川						●							●	●	●	●			
15	中谷洞穴	佐々川																●	●		
16	長谷洞穴	佐々川												●						●	
17	橋川内洞穴	佐々川						●		●	●	●		●	●	●	●				●
18	福井洞窟	佐々川支流福井川	●？	●	●	●●		●				●		●	●		●	●	●	●	●
23	上直谷岩陰	佐々川支流福井川	●？	●？																	
19	直谷岩陰	佐々川支流福井川	●	●	●		●	●		●	●	●	●	●	●	●	●	●●	●	●	●
20	不動明王谷岩陰	佐々川支流福井川		●？																	
21	牧ノ岳洞穴	佐々川支流福井川						●					●	●	●						
22	大悲観岩陰	小佐々川						●		●		●	●	●		●		●			●

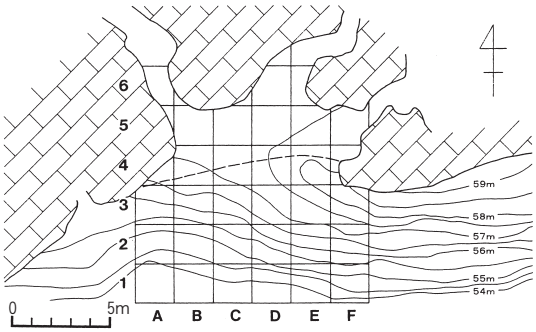
※●は、その時期の拠点洞穴、●は、衛星洞穴、●はその中間的洞穴を示す。



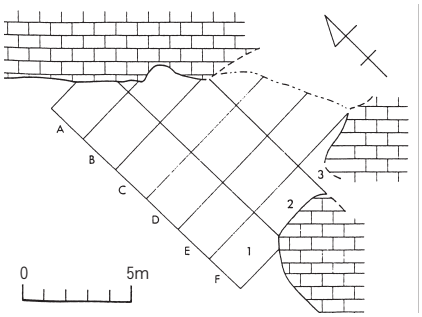
※遺跡番号は
第４表参照。



帝釈観音堂洞窟遺跡調査区配置図



帝釈大風呂洞窟遺跡調査区配置図



帝釈弘法滝洞窟遺跡調査区配置図

第13図　広島県帝釈峡洞穴遺跡群の分布と縄文時代草創期の洞穴遺跡（中越2001他を改変）

ることはないであろう。日向洞窟の前方100mのところにある日向洞窟遺跡西地区遺跡が発掘調査され（井田1988，佐川・鈴木編2006），豊富な遺物がオープンスペースで出土したことである。大形竪穴状遺構や6基の土坑，剥片集中地点のデポなどの各種遺構が広範囲で検出された点は看過すべきではない。

このように東北高畠洞穴群を総括すると，洞穴遺跡の中でも出土遺物の量的な差異は拠点的な遺跡かキャンプ的な遺跡かに峻別せざるを得ないであろう。とりわけ日向洞窟遺跡西地区出土の遺物はまさに他遺跡に搬出するセンター的な石器製作址と考えられよう（佐川他2006）。

一方長崎県佐世保市も洞穴遺跡が12個所と多い。しかし縄文時代草創期の洞穴は福井洞窟，直谷岩陰と泉福寺洞穴の3遺跡が中心となっている（第12図・第3表）。加えて西北九州特有の縄文時代草創期の石器群は細石器が主体となる。泉福寺洞穴は豆粒文土器，隆線文土器，爪形文土器を中心とするが，福井洞穴は旧石器時代の細石器ないしそれ以下の石器文化を含む可能性がある（柳田2013）。泉福寺洞穴では爪形文土器以降の草創期後半の文化層も認められている。両者は共に隆線文土器を含む文化層が卓越し，福井洞穴は直谷岩陰と1kmにも満たない至近距離にあるが，泉福寺洞穴との距離は大凡9kmくらい離れている。その洞穴に関係する開地遺跡は認められていない。今後三者の洞穴出土の細石器関連の個体別資料の同定や接合作業を試みる必要があろう。

広島県帝釈峡遺跡群では旧石器時代から縄文時代草創期にかけての遺跡は帝釈峡馬渡岩陰，帝釈峡観音堂洞窟，帝釈峡大風呂洞窟，帝釈峡弘法滝洞窟よりなる。そのうち馬渡岩陰と観音堂洞窟のみ旧石器時代が認められる（第13図）。出土資料はそれほど多くはない（第4表）。また草創期の出土遺物も多くない。

洞穴遺跡はどのように利用されたかそれを解明するのは大変難しい。それは洞穴遺跡を全面的に発掘した例は決して多くないからである。しかし少ない知見から推しても長崎県泉福寺洞穴や福井洞穴は家族で使用する細石器の量を完全に超えて

第4表　広島県帝釈峡遺跡群洞穴遺跡とその時期（中越2001より）

	遺跡名	時　　期
1	帝釈馬渡岩陰遺跡	旧石器，縄文草創期・早期・前期，弥生
2	帝釈寄倉岩陰遺跡	縄文早期・前期・中期・後期・晩期，弥生以降
3	帝釈猿神岩陰遺跡	縄文後期・晩期
4	帝釈名越岩陰遺跡	縄文早期・前期・中期・後期・晩期，弥生以降
5	帝釈猿穴岩陰遺跡	縄文早期・後期・晩期，弥生
6	帝釈思案洞岩陰遺跡	縄文前・後期
7	帝釈白石洞窟遺跡	縄文早期・前期・後期，弥生以降
8	帝釈五丈敷岩陰遺跡	縄文後・晩期
9	帝釈金山遺跡	縄文後期
10	帝釈観音堂洞窟遺跡	旧石器，縄文草創期・早期・前期・中期・後期・晩期，弥生以降
11	帝釈大風呂洞窟遺跡	縄文草創期末・早期・前期・中期・後期
12	帝釈一ツ橋洞窟遺跡	縄文
13	帝釈天神洞洞窟遺跡	縄文晩期
14	帝釈江草遺跡	縄文後期
15	帝釈こうもり穴岩陰遺跡	縄文早期・後期・晩期，弥生以降
16	帝釈次郎岩岩陰遺跡	縄文
17	帝釈次郎岩洞窟遺跡	縄文後期
18	帝釈須床洞窟遺跡	縄文後期
19	帝釈日比須岩陰遺跡	縄文後・晩期
20	帝釈弘法滝洞窟遺跡	縄文草創期・早期・前期・中期・後期・晩期，弥生以降
21	帝釈和宗岩陰遺跡	縄文，弥生
22	帝釈穴神岩陰遺跡	縄文早期・前期・後期
23	帝釈穴神南岩陰遺跡	縄文
24	戸宇牛川岩陰遺跡	縄文早期・前期・後期
25	久代東山岩陰遺跡	縄文早期・前期・後期・晩期，弥生以降
26	久代横呂山岩陰遺跡	縄文
27	久代穴小屋洞窟遺跡	縄文？
28	哲西狼穴洞窟遺跡	縄文早期・前期
29	久代高野散布地	縄文？
30	新免手入岩陰遺跡	縄文早期・前期・後期
31	豊松堂面洞窟遺跡	縄文早期・前期・後期・晩期，弥生以降
32	豊松堂面遺跡	縄文前期・後期・晩期，弥生
33	総領岩谷堂岩陰遺跡	縄文後期
34	上下屏風洞洞窟遺跡	縄文前期・後期

いることは注意される。とりわけ泉福寺洞穴9層は隆線文土器段階であるが，細石刃は2,153点，細石核やその未成品は162点と多い（第2表）。つまり泉福寺洞穴は細石核の搬出にかかわる共同作業場とも言えよう。他方帝釈峡遺跡群の洞穴遺跡について，中越俊夫氏は竪穴住居と洞窟のテラスの面積がほぼ同面積のものが多く，1家族ないし洞穴の面積が多くても2家族程度のものと類推し，結果として，帝釈峡遺跡群の1洞穴ないし岩

陰には1家族の使用と推定している(中越2001)。それゆえ家族的な居住の場として捉えられる所以であろう。

7．日本における洞穴遺跡の様相

日本における洞穴遺跡は681か所以上が認められる（麻生2001)。そのうち縄文時代草創期の遺物が出土する洞穴遺跡は50か所が確認されている。洞穴遺跡の数に較べたらそれほど多い数ではない。最も多くの洞穴遺跡を利用するのは約8,000年前頃の縄文時代早期押型文土器の段階であろう。何故縄文時代草創期の段階と比べたら早期の段階は多くなるのであろうか。それはいくつかの要因が推定される。一つは移動生活ないし半定住生活から定住生活へと共に遺跡数の増大から人口増が考えられる。二つは定住化に伴い集落，漁撈拠点，狩猟場，植物質食料の採取場といった役割が明瞭化したことから，大所帯の集団は開地遺跡を拠点として洞穴遺跡をキャンプ的な場ないしは葬送の場として大いに利用していったことが推定される。三つには気候変動に伴う温暖化によるその押型文土器直前には新ドリヤス期によって急激に寒冷化し，その後約10,000年前に後氷期になっていくのであるが，落盤が多いように見受けられる。気候変動に伴うものかあるいは大きな地震があったものと思われる。

このような3点は自然現象を含めて今後総合的に捉えていく必要があろう。それにも増して森林で覆われた山が多い日本列島ではまだまだ未発見の洞穴遺跡が眠っているものと思われる。今後の悉皆調査が痛感される。

おわりに

本稿は縄文時代草創期の洞穴遺跡を中心として論じる中で補足的に後続する時期の洞穴遺跡の研究成果を援用させていただきながらまとめた。

洞穴遺跡の研究は1967年に日本考古学協会洞穴調査委員会から刊行された『日本の洞穴遺跡』（平凡社刊行）が最もよくまとまっている。その後麻生優先生によって2001年に千葉大学・愛知学院大学講義録として出版された『日本における洞穴遺跡研究』は研究の大きな成果となっている。

筆者は麻生先生の指導で佐世保市岩下洞穴，下本山岩陰，泉福寺洞穴の調査に参加した。また小林達雄先生や下川達彌氏の指導で福井洞穴の委員として関わることができた。その関連で久村貞男氏等が調査した直谷岩陰の発掘調査においても立ち会うことができた。諸先生のご指導，ご鞭撻に深く感謝する。また岡本東三氏とは上記洞穴遺跡にかかわりをもち，斬新な意見を頂戴した。記して感謝する。柳田裕三，川内野篤，松尾秀昭の佐世保市教育委員会社会教育課員ならびに佐世保市教育員会の機関に御礼申し上げる。なお本稿は愛知県豊橋市美術博物館・文化財センター主催の『日本の洞穴遺跡と嵩山蛇穴洞窟』のシンポジウムの講演においてパワーポイントでその概要を発表した。その際豊橋市文化財センターの村上昇氏，文化庁記念物課の水ノ江和同氏，首都大学東京の山田昌久氏にはご指導をいただいた。また萩原博文，川道寛氏には泉福寺洞穴を通して情報をいただいたことを記しておきたい。

註

1）愛知県豊橋市嵩山蛇穴洞穴は石灰岩に形成された間口3.5m，奥行約70mを測る洞窟遺跡である。出土遺物は縄文時代草創期から後期の遺物が出土している。ハマグリ，シジミ等の貝類が出土している。おそらくこの洞穴で完結するものではなく，集落址や市内に広がっている石灰岩地帯ないしは静岡県域の石灰岩地帯に形成された洞穴との関連が考慮されよう。

2）富山県氷見市大境洞窟は1917(大正7)年に柴田常恵により初めて発掘調査され，『日本石器時代人民遺物発見地名表』にも紹介されている。

3）堀口萬吉氏は泉福寺洞穴の成因について「層理の発達が悪く，塊状をしているが，場所によっては斜交葉理の認められる部分があり洞穴やノッチ状の凹みはこの部につくられている」点を指摘している（堀口1980)。このことから中村由克，石井久夫，松橋均氏等は佐世保市内の洞穴遺跡を踏査し，泉福寺洞穴や岩下洞穴が風化作用によって形成されたものと捉えた（中村・石井・松橋2002)。

4）小林達雄氏は1997年の記念講演で，①位置を固定する洞穴では，その居住地での選択の幅が制限さ

れる。②生活空間の広狭を予め決定され，伸縮は不可能である。この2点を理由として早期以降の洞穴離れが促進されたことを指摘している（小林1997）。

5）小林公治は「遺物包含層をどのように理解するか？―旧石器時代文化層分析を通じて―」中での遺物量の濃淡を等高線，等量線で表現することの有効性を具体的に城山遺跡A地点第4文化層石器と礫を用いて図示している（小林1998）。このような理解は鈴木次郎，矢島國雄によるビーナスラインも同様であろう（矢島・鈴木1976）。

6）長野県湯倉洞穴の報告で永峯光一氏は湯倉のような高地の洞穴に生活している人々を里住みの人々が一時期山に入って生活する所謂「山住み」と評価している（永峯2001）。

引用文献

赤城三郎　1975「洞くつ」『資料 第四紀の日本列島−5』

赤星直忠　1935「横須賀市田戸先史時代の遺跡調査」『史前学雑誌』7−6

麻生優　1968『岩下洞穴の発掘記録』佐世保市教育委員会

麻生優　1969「『原位置』論序説」『上代文化』38

麻生優　1975「『原位置』論の現代的意義」『物質文化』24

麻生優編　1984『泉福寺洞穴の発掘記録』佐世保市教育委員会

麻生優・岡本東三　1994『千葉県館山市大寺山洞穴第1次発掘調査概報』千葉大学文学部考古学研究室

麻生優・岡本東三　1996『千葉県館山市大寺山洞穴第3・4次発掘調査概報』千葉大学文学部考古学研究室

麻生優　1996『シンポジム『洞穴遺跡の諸問題』発表要旨』

麻生優　1997『第2回シンポジム『洞穴遺跡の諸問題』発表要旨』

麻生優　1998『第3回シンポジウム『洞穴遺跡諸問題』発表要旨』

麻生優　2001『日本における洞穴遺跡研究』千葉大学・愛知学院大学講義録

石原正敏　1997「洞穴遺跡と開地遺跡の関係―新潟県小瀬が沢・室谷洞穴をめぐって―」『第2回シンポジム『洞穴遺跡の諸問題』発表要旨』

笠懸野岩宿文化資料館　2003『高畠町の縄文時代』

岡本東三　1996「千葉県館山市大寺山洞穴」『シンポジウム「洞穴遺跡の諸問題」発表要旨』千葉大学

江坂輝彌　1943「稲荷台系文化の研究」『古代文化』13−8

江坂輝彌　1952「日本始原文化の起源問題」『古代学』1−2

江坂輝彌　1948「日本新石器時代の上限年代」『日本考古学』1−1

江坂輝彌　1959「縄文土器文化の系統」『歴史教育』7−3

江坂輝彌・岡本健児・西田栄助　1967「愛媛県上黒岩陰」『日本の洞穴遺跡』日本考古学協会洞穴遺跡調査特別委員会

小川榮一　1950「九合洞窟石器時代遺跡」『岐阜県史跡名勝天然記念物報告書』11輯

柏倉亮吉・加藤稔　1963「山形県高畠町火箱岩洞穴の概要」『洞穴遺跡調査会会報』7

柏倉亮吉・加藤稔　1967「4　山形県下の洞穴遺跡」『日本の洞穴遺跡』日本考古学協会洞穴遺跡調査特別委員会

勝部明生　1975『帝釈峡洞窟遺跡―日本原人の謎を探る―』

加藤稔　1967「山形県日向洞穴における縄文時代初頭の文化」『山形県の考古と歴史』

加藤稔・佐々木洋治　1962「山形県一ノ沢遺跡」『上代文化』31・32

賀川光夫・橘昌信・内藤芳篤　1987『本耶渓町史―原始』本耶渓町史刊行会

勝部明生　1976『帝釈峡洞窟遺跡―日本原人の謎を探る―』大阪市立博物館

金井紋子　2012「阿部遺跡（尻労阿部洞窟）」『青森県埋蔵文化財発掘調査報告会』資料

鎌木義昌・芹沢長介　1967「2　長崎県福井洞穴」『日本の洞穴遺跡』日本考古学協会洞穴遺跡調査特別委員会

香原志勢他　1971「災害死と推定される早期縄文時代小児骨」『人類学雑誌』79−1

河瀬正和　1977「中国山地帝釈峡遺跡群における縄文早期文化の二, 三の問題」『考古論集―慶祝松崎寿和先生六十三歳論文集―』松崎寿和先生退官記念事業会編

川内野篤　2009『福井洞窟範囲確認調査報告書』⑵佐世保市文化財調査報告書1

川越哲志1976「帝釈観音堂洞窟遺跡の調査（第5次～第11次調査）」『帝釈峡遺跡群』

河村善也　1981「帝釈観音堂洞窟遺跡先土器層準出土の哺乳動物遺体（その2）・1976年（第13次）発掘の哺乳動物遺体」『広島大学文学部帝釈峡遺跡群発掘調査室年報』Ⅳ

河村善也　1982「帝釈観音堂洞窟遺跡先土器層準出土の哺乳動物遺体（その3）・1978年（第14次）発掘の哺乳動物遺体」『広島大学文学部帝釈峡遺跡群

発掘調査室年報』Ⅴ
栗島義明　1997 「洞穴遺跡と開地遺跡の関係―埼玉県神庭洞窟をめぐって―」『第2回シンポジム『洞穴遺跡の諸問題』発表要旨』
小泉政啓　1981 「Ⅴ 帝釈観音堂人第1号について 1. 帝釈観音堂堂人第1号の組織学的観察『広島大学文学部帝釈峡遺跡群発掘調査室年報』Ⅳ
小林達雄　1963 「長野県荷取洞窟出土の微隆起線文土器」『石器時代』6
小林達雄　1997 「特別講演要旨　ヒトと洞穴」『第2回シンポジウム『洞穴遺跡の諸問題』発表要旨』
小林公治　1998 「遺物包含層をどのように理解するか？―旧石器時代文化層分析を通じて―」『遺跡・遺物から何を読みとるか』帝京大学山梨文化財研究所研究集会報告集1
佐川正敏・鈴木雅　2006 『山形県東置賜郡高畠町日向洞窟遺跡西地区出土石器群の研究Ⅰ』
佐々木洋治　1971 『高畠町史 別巻考古資料編』
佐々木洋治　1996 「2. 山形県高畠洞穴群の諸問題」『シンポジウム『洞穴遺跡の諸問題』発表要旨』
佐藤雅一他　2004 『黒姫洞窟遺跡―第1期発掘調査報告―』入広瀬村埋蔵文化財報告1
柴田常恵　1918 「越中氷見郡宇波村大境の白山社洞窟」『人類学雑誌』33-7
潮見浩　1967 『帝釈峡遺跡群』帝釈峡遺跡群発掘調査団
潮見浩・河瀬正利　1980 「5. 調査の成果」『広島大学文学部帝釈峡遺跡群発掘調査室年報』Ⅲ
白崎高保　1941 「東京稲荷台先史遺跡」『古代文化』12-8
白石浩之　1998 「3. 洞穴遺跡からみた居住空間―泉福寺洞穴を中心として―」『第3回シンポジウム『洞穴遺跡の諸問題』発表要旨』
杉原荘介・芹沢長介　1957 『神奈川県夏島における縄文文化初頭の貝塚』明治大学文学部研究報告考古学第二冊
杉原荘介　1967 「群馬県岩櫃山における弥生時代の墓址」『考古学集刊』3-4
澄田正一・安達厚三　1967 「6　岐阜県九合洞穴」『日本の洞穴遺跡』平凡社
関孝一・永峯光一　2000 『鳥羽山洞窟の調査―古墳時代葬所の素描と研究―』鳥羽山洞窟調査団
芹沢長介・中山敦子　1953 「新潟県津南町本ノ木遺跡調査予報」『越佐研究』12
芹沢長介・鎌木義昌　1965 「長崎県福井岩陰」『考古学集刊』3-1
石灰石鉱業協会　1977 『石灰石の話』
高安克己　1961 『洞くつの世界』ぼくらの科学1 千代田書房
帝釈峡遺跡群発掘調査団　1976 『帝釈峡遺跡群』亜紀書房
高畠町教育委員会　1988 『山形県高畠町日向洞窟遺跡・西地区』第1次・第2次調査説明資料
東京帝国大学　1917 『日本石器時代人民遺物発見地名表』第4版
東京都立埋蔵文化財調査センター・㈶東京都埋蔵文化財センター　1992 『縄文誕生―平成4年度展示解説―』
豊橋市美術博物館　2014 『嵩山蛇穴と縄文のはじまり』予稿集パンフレット
中越利夫　1997 「洞窟・岩陰遺跡の利用状況―帝釈名超岩陰遺跡の場合―」『広島大学文学部帝釈峡遺跡群発掘調査室年報』XII
中越利夫　1997 「3. 広島県帝釈峡遺跡群」『第2回シンポジウム『洞穴遺跡の諸問題』発表要旨』
中越利夫　2001 「Ⅱ 帝釈峡遺跡群の諸問題」『広島大学文学部帝釈峡遺跡群発掘調査室年報』XV
中村孝三郎　1963 『小瀬が沢洞窟』長岡市立科学博物館研究報告3
中村孝三郎　1964 『室谷洞窟』長岡市立科学博物館研究報告6
中村由克・石井久夫・松橋均　2002 「佐世保市周辺の第四紀地質と洞穴の形成時期」『泉福寺洞穴研究編』泉福寺洞穴研究編刊行会
永峯光一・関孝一・大原正義・広瀬昭弘他　2001 『湯倉洞窟―長野県上高井郡高山村湯倉洞窟調査報告―』高山村教育員会
西沢寿章　1983 「栃原岩陰遺跡」『長野県史・考古資料編全』1-3
萩原博文　2002 「土器出現期における生活面の区分と出土遺物の特徴」『泉福寺洞穴研究編』泉福寺洞穴研究編刊行会
藤田等・川越哲志　1965 「帝釈観音堂洞窟遺跡の一次調査」『帝釈峡遺跡群の研究』2
久村貞男・萩原博文・川道寛他　2003 「菰田洞穴の旧石器時代石器群」『菰田洞穴発掘調査報告書』平成14年度佐世保市埋蔵文化財発掘調査報告書
久村貞男・川内野篤・早田勉　2007 『福井洞窟範囲確認調査報告書　付録直谷岩陰試掘調査報告書』平成18年度佐世保市埋蔵文化財発掘調査報告書
久村貞男・川内野篤・杉山真二　2008 『福井洞窟範囲確認調査報告書　付録直谷岩陰試掘調査報告書』平成18年度佐世保市埋蔵文化財発掘調査報告書
久村貞男・柳田裕三・西山賢一　2010 『佐世保の洞窟遺跡』Ⅱ　佐世保市文化財調査報告書3
ファッキーニ, フィオレンツォ　1993 『人類の起源』

堀口萬吉　1980 「泉福寺洞穴の成因」『考古学ジャーナル』172
マーリンガー, ヨハネス　1957 『先史時代の宗教』考古学研究所
牧雄一郎・松本仁之　2000 「石灰石鉱業の現状と課題」『地質ニュース』547
村上昇　2014 「嵩山蛇穴と縄文のはじまり」『嵩山蛇穴と縄文のはじまり』予稿集パンフレット
御堂島正・上本進二　1987 「遺物の水平・垂直移動―周氷河作用の影響に関する実験的研究―」『神奈川考古』23
御堂島正・上本進二　1988 「遺物の地表面移動―雨・風・霜柱・植物の影響について―」『旧石器考古学』37
御堂島正　1994 「踏みつけによる遺物の移動と損傷」『旧石器考古学』48
水之江和同　2014 「史跡嵩山蛇穴の保存と活用」『嵩山蛇穴と縄文のはじまり』予稿集パンフレット
モルティエ Mortilet, G.　1883　DE Lefré historique Paris
山田昌久　2014 「洞穴遺跡の調査―長野県相木川流域における岩陰遺跡群調査―」『嵩山蛇穴と縄文のはじまり』予稿集パンフレット
山内清男・佐藤達夫　1960 「縄紋土器文化のはじまる頃」『上代文化』30
山内清男　1967 「4　洞穴遺跡の年代」『日本の洞穴遺跡』日本考古学協会洞穴遺跡調査特別委員会
八幡一郎　1936 「日本に於ける中石器文化的様相」『ミネルヴァ』1–2
八幡一郎　1967 「3　古代人の洞穴利用に関する研究」『日本の洞穴遺跡』日本考古学協会洞穴遺跡調査特別委員会
矢島國雄・鈴木次郎　1976 「相模野台地における先土器時代研究の現状」『神奈川考古』1
柳田裕三・川内野篤・松尾秀昭・久村貞男　2013 「(3)史跡　福井洞窟の発掘調査」『一般社団法人日本考古学協会第79回総会研究発表要旨』
柳田裕三　2013 『史跡福井洞窟発掘調査速報』佐世保市文化財調査報告書10
リュムレー Lumley, H. de　1976　La Préhistoire Française Tome I. C.N.R.S.
ラルテ Lartet, Edouard Armand Isidore Hyppolyte　1864 Sur l'ancienneté géologique de l'espèce humaine dans l'Europe occidentale, 1860; Cavernes du Périgord.
渡辺丈彦・阿部祥人・奈良貴志史他　2013 「(1)下北半島石灰岩洞穴における考古学的・人類学的研究」『一般社団法人日本考古学協会第79回総会研究発表要旨』